

韓半島に於ける対災異認識と災害対処の文化 —『三国遺事』後半部に見る事例の検証を中心として

Accident Recognition in Korean Peninsula and Culture of Accident Handle
- Focusing on Inspection of the Case seen in the second half Parton on *Sangokuiji*

小林 健彦
Takehiko KOBAYASHI

要旨

日本（列島）は南北に湾曲して細長く、又、列島部分の幅も狭い。そこに横たわる自然地形も狭小な国土の割には起伏に富む。又、島嶼部も夥しく存在する。従って、日本に於いては歴史的にも、地震や火山噴火と言った地盤に関わる自然災害だけではなく、津波や高潮、高波、大雨、洪水、土石流等と言った「水災害」の影響をも大きく受けて来たという特質がある。日本の古代王権は、或る種の意図を以って、そうした自然災害を文字情報としての記録に残すことを行なって来た。ここで言う処の「或る種の意図」とは、それらの自然的な事象の発生を、或る場合には自らの都合の良い様に解釈をし、加工し、政治的に利用、喧伝することであった。その目的は、災害対処能力を持ちうる唯一の王権として、自らの「支配の正当性」を合理的に主張することであったものと考えられる。それでは、韓半島の場合にはどうであろうか。

筆者が『災害対処の文化論シリーズ I ～古代日本語に記録された自然災害と疾病～』（DLMarket Inc(データ版)、シーズネット株式会社・製本直送.comの本屋さん(電子書籍製本版)、2015年7月1日、初版発行）に於いても指摘をした如く、「咎徴（きゅうちょう）」の語が示す中国由来の儒教的災異思想の反映はその一例である。

ところで、本稿に先立って刊行した『災害対処の文化論シリーズ VI 韓半島における災害情報の言語文化 ～倭国に於ける災害対処の文化論との対比～』（単著書、販売：シーズネット株式会社（2019/2/1））で主たる素材として扱った「三国史記」は、韓半島で現存する最古の記録書とされており、新羅国（新羅本紀12巻）、高句麗国（高句麗本紀10巻）、百濟国（百濟本紀6巻）3ヶ国の事績を体系的、時系列的に記したものである。3ヶ国の本紀の他にも、年表3巻（上、中、下）、志9巻、列伝10巻、合計50巻よりなる。西暦1145年、高麗国の仁宗（第17代国王）の命に依り、金富軾等19名の史官等が編纂、担当し、進上したとされている。李王朝の中宗代（1506～1544年）に慶州で刊行された木版本が刊本としては現存最古のもので、その影印本が流布している。

「三国史記」は、中国大陆で行なわれていた正史編纂事業を大いに意識して作成されたらしく、その意味に於いては、日本に於ける六国史、取り分け、「日本書紀」的存在であったのかもしれない。それ故に、その編纂に際しては、東アジア世界に特有の、特定の歴史観、国家観、対外観、宇宙観、そして、対自然（災害）観等が色濃く反映されていた可能性もあり、史料としての取り扱いには慎重であるべきであって、慎重な史料批判も必要とされた。つまり、正史である以上、そこに記された事象に曲筆、虚偽、隠蔽、粉飾、宣伝等の作業が存在していることも十分考慮されたのである。又、記録の特性上、編纂者の故意ではないものの、結果としてその事象が偽であったり、偏見や誤解が包含されている可能性に就いても、排除をすることは出来ないとした。

それでは、「三国遺事」の場合に在っては、どうであろうか。「三国遺事」は、新羅国、高句

麗国、百済国に関わる古記録、伝承、神話等を収集、編集し、そこに就いての遺聞逸事を記した書物である。高麗王朝期に、一然（いちねん。普覚国師。1206～1289年）に依り撰述され、一部分はその弟子であった無極が補筆したとされる。全5巻より成る。本稿では、そうして成立した「三国遺事」に記された、自然災害、人為的災害関係記事の内容、編纂意図や位置付けを、言語文化、文化論の視角より探ってみることとする。「三国遺事」に於いては、如何なる対自然災害観や、災害対処の様相が記録されていたのか、いなかったのかを追究することが本稿の目的とする処の1つである。更には、こうした素材を使いながら、韓半島に於ける災害対処の様相を文化論として構築をすることが出来得るのか、否かを検証することも2つ目の目的として掲げて置く。

本稿では、そうした観点、課題意識より、韓半島に於ける対災害観や、災害対処の様相を文化論として窺おうとしたものである。シリーズ後半部分に当たる本稿では、気象、その他の事象に関わる記事を中心として、検証作業を進めて行くこととする。

尚、本稿に於いて使用する「三国遺事」は、昭和3年（1928）9月に朝鮮史学会が編集、発行した刊本であり、昭和46年（1971）7月に国書刊行会より復刻、発行された『三国遺事（全）』である。更に、史料引用文中の読み方や現代語訳等に関しては、金思燁氏訳『完約 三国遺事』の記載に依った部分が存在することを明示しておく。

キーワード：韓半島、三国遺事、災害、気象、災異認識

はじめに：

「三国遺事」は、新羅国、高句麗国、百済国に関わる古記録、伝承等を収集、編集し、そこに就いての遺聞逸事を記した書物である。高麗王朝期に、一然（いちねん。普覚国師。1206年～1289年）に依り撰述され、一部分はその弟子であった無極が補筆したとされる。全5巻より成る。一然禅師に依る晩年の作である。ただ、その内容には先行する「三国史記」（1145年）を大いに参照した形跡があり、決してオリジナル性が高いとも言えない。正史である「三国史記」を日本に於ける「日本書紀」、後発の「三国遺事」を「古事記」的な立場に位置付ける見解もある。

本稿では、この様な経緯を持った「三国遺事」に記された、自然災害関係記事の内容、その編纂意図や位置付けをも、言語文化、「災害対処の文化論」の視角より探ってみることとする。その際には、上で確認をした、編纂物としての本書の特徴、特質に関して、十分に留意をすることとした。シリーズ後半部に当たる本稿に於いては、気象災害、その他の事象を中心としながら、当該課題の追究に当たることとする。

1：気象災害

ここでは、「三国遺事」に見られる気象災害関連記事を検証する。先ず、当該記事を時系列的に抽出し、掲出する。尚、同年中の記事に就いては、最初に記される災害種に依り分けをし、因果関係を考慮する為、複数の種類の記事を掲出した場合もある。

（1）巻一、桃花王。鼻荊郎（コカシラン）：「第二十五、舍輪王。諡眞智大王。姓金氏。（中略）御國四年。政亂荒淫。國人廢之。前此（比。ころ）。沙梁部之庶女。姿容艷美。時號桃花娘。王聞而召致宮中。欲幸之。女曰。女之所守。不時二夫。（中略）王見廢而崩。後二年。其夫亦死。浹（めぐる）旬忽夜中。王如平昔來於女房（中略）以其女入於房。留御七日。常有五色雲覆屋。香氣滿室。七日後忽然無蹤（あと。行方）。女因而（よりて、よって）有娠。月滿將產。天地振動。産得一男。名曰鼻荊（コカシ。鬼神）。眞大王聞其殊異。収養宮中。年至十五。授差（任命する）執事（国家機密機関であった執事省の官人）。毎夜逃去遠遊。王使勇士五十人守（監視する）之。毎飛過（飛び越える）月城。西去荒川岸上。在京城西。率鬼衆遊。勇士伏林中窺伺。鬼衆。聞諸寺曉鐘各散。郎亦歸矣。軍士以

事礼來奏。王召鼻荊曰。汝領鬼遊、信乎。郎曰然（その通り）。王曰。然則汝使鬼衆成橋於神元寺北渠（みぞ。小川）。一作神主衆寺。誤。一云荒川東深渠。荊奉勅。使其鍊（切って整形する）石。成大橋於一夜。故名鬼橋。王又問。鬼衆之中。有出現人間、輔朝政者乎。曰有吉達者。可輔國政。王曰與來。翌日荊與俱見。賜爵執事。果忠直無雙。時角干（伊伐浪、伊罰干。京都の長官）林宗無子。王勅爲嗣子。林宗命吉達創樓門於興輪寺南。每夜去宿其門上。故名吉達門。一日吉達變狐而遁去。荊使鬼捉而殺之。故其衆聞鼻荊之名。怖畏而走。時人作詞曰。聖帝魂生子、鼻荊郎室亭。飛馳諸鬼衆。此處莫留停。郷俗帖（たれる）此詞以辟（さける）鬼」

〔新羅国の第25代王であった真智王（在位期間は576～579年）と、次の真平王（在位期間は579～632年）の治世に於ける「鬼」に関わる逸話である。

真智王は、沙梁部の庶女であった桃花娘に興味を抱き、宮廷に呼んでこれを支配しようとした。彼女は、容姿端麗な美女であった。しかし、彼女は二夫には、ま見えないことを理由として、王の要求を拒んだのであった。その後、王は在位4年にして廃位させられ、その直後に薨去していた。それは、彼に国の統治能力が無かったからであった。桃花娘の夫が死去した10日後の夜半、薨去した筈の真智王は彼女の部屋に現われ、両親の許しの下、彼女は7日間、王と共に過ごしたのであった。その間、常に五色の雲が家を蔽い、香気が室内を満たしていたのである。

その7日後、王は忽然としてその姿を消した。桃花娘はその後、妊娠したのである。そして、満月の時（「月満將産」）、天地が振動し、1人の男子が生まれた。彼は鼻荊（コカシ。鬼神）と名付けられた。次の真平王はこの特異な話を聞き、彼を宮中で養育することとした。臈て15歳に成長をした鼻荊は、王より執事の地位を与えられたが、毎夜、遠くに迄、遊びに出掛けた為、王は50人の警護の兵を付けた。彼の遊び場所とは、京城の西を流れる荒川の岸辺であり、そこで多くの鬼と遊ぶのであった。その鬼たちは、明け方を知らせる諸寺の鐘の音を聞くと解散し、鼻荊も又、帰宅するのであった。王は鼻荊に事の詳細を問うた処、彼は素直にそれを認めた為、王は鼻荊に対し、鬼達を使って神元寺の北を流れる小川に橋を架ける

様、命じた。

鼻荊は鬼達を使い、一夜にして大橋を完成させ、その橋は「鬼橋」と命名されたのであった。そこで王は、その鬼達の中に人間となって、朝政を輔弼することの出来る者がいないか、どうかを鼻荊に尋ねた。彼は、鬼の中より吉達を推薦し、執事となった吉達はその有能さから、王は後継者の居なかった角干の林宗に命じて、その嗣子とした。林宗は吉達に対して、興輪寺の南に樓門を建てる様、指示し、完成後には吉達がその門の上に寝たので、その樓門は吉達門と名付けられた。或る時、吉達は狐に化け、逃げてしまったので、鼻荊は鬼を使ってこれを捉え、殺害してしまった。それ以降、彼の仲間達は鼻荊の名を聞くなり、恐怖の余りに逃げ出すのであった。そこで、当時の人は次の詞を作った。「聖帝（真智王）の魂が生んだ子、鼻荊の屋敷はここにある。蜘蛛の子を散らすが如く逃げ去る鬼達よ。この場所に留まってはならない。」この詞が書かれた紙を張って鬼を避けることが、郷土の習俗となっている、とするものである。

先ず、ここでは、①四年、二夫、二年、10日（浹旬）、七日、一男、年至十五、五十人、一夜等と言った様に、具体的な数量や数量詞が多用されているという特徴がある。それは、第一には、この話の内容に信憑性や具体性を付与する目的からであった可能性がある。取り分け、真智王が桃花娘と関わった際の7日と言う時間には、如何なる意味があるのであろうか。7自体は奇数であることより、陰陽説に於いては、積極的性格を有する陽の数字である。又、仏典に於いて説かれる、7種の宝物に起因した数であった可能性もある。法華経に於いては、金、銀、瑠璃（るり）、真珠、瑪瑙（めのう）、磤磤（しやこ）、玫瑰（まいかい）をそれとして挙げる。更には、中国に於ける7月7日の乞巧奠（七夕）の習俗にも、7との関連性が想起される。

つまり、7と言う数字は、少なく共、「三国遺事」中に於いてはラッキーセブンとしての見做しなのである。

②「常有五色雲覆屋。香氣滿室」とは、一体、如何なる状況を表現しているのであろうか。「五色雲」は、如何にも通常の気象現象としての雲の発生では無いのかもしれない。その五色とする色彩感覚よりは、青・緑、赤・紅・朱、黄、白、玄・

黒より成る陰陽五行色を想起させる。

「常有五色雲覆屋。香氣滿室」現象の後で、桃花娘は真智王と考えられる人物の子を妊娠することよりも、当該五色雲現象は吉兆として位置付けられていたものと考えられる。又、五色と言う表現法よりは、虹の出現を比喩的に表わしていた可能性もある。ただ、虹の出現であれば、白虹の様に、必ずしもそれが吉兆ではなかった（概して凶兆）ことも想定されることより、その可能性は低い。

先述した様に、日本の「延喜式 卷第二十一」の「治部省一祥瑞一大瑞」⁽¹⁾に於いても、河水五色、江（海）水五色、同中瑞に、五色鴈、の如く、五色に関わる事例を祥瑞として挙げているのである。「延喜式」は三代格式の1つであり、延長5年（927）に完成した。その内容は、先行した「弘仁式」、「貞観式」以降に於ける、律令を補完した形での施行細則を取捨、選択して集大成した法典である。こうした、五色吉祥観が中国大陆発祥、韓半島由来で日本にも伝来し、取り込まれていたことを窺わせる事象である。

それでは、「香氣」の方はどうであろうか。「三国史記」中にも、匂い、又、臭気に関する記述は多くは無いのである。唯一確認できるのが、「新羅本紀 第三」實聖尼師今12年（413）8月条に見える、「雲起狼山。望之如樓閣。香氣郁（いく。香りが良い）然。久而不歇（かれる、つきる、やすむ、やむ）。王謂是必仙靈降遊。應是福地。從此後禁人斬伐樹木」記事である。この場合の「香氣」とは、噴煙であったものと考えられる、可視的に楼閣の様な形状の雲を伴っていたとし、それらが中々止まなかったとしていることより、火山噴火、水蒸気爆発、それに伴う火山性ガス（硫化水素、亜硫酸ガス、二酸化炭素等）放出ではないかと推定を行なったのである。山火事発生に伴う煙や臭いに対し、雲や香氣と言う表現法を用いたとは考え難い。

統一新羅時代（677～935年）に在って、韓半島の南方にある濟州島は新羅国へ朝貢を行っていたとされることより、「常有五色雲覆屋。香氣滿室」記事が火山噴火に関わる現象として出現していたとするならば、当該桃花娘に関わる逸話の舞台は、濟州島であった可能性がある。何故ならば、半島に於いて確認されている火山は、北方に在る白頭山（中華人民共和国と朝鮮民主主義

人民共和国との国境地帯）と、濟州島に在る漢拏山のみであるからである。新羅国が高句麗国、渤海国領域に在った白頭山周辺に於ける伝承を、自らのものとして取り込むのは、地理的に見て、かなり困難であると言わざるを得ないのである。

尚、「新羅本紀」實聖尼師今12年8月条は、前年条に記された「以奈勿王子卜好。質於高句麗」を吉兆とした位置付けであると指摘をした。当該「三国遺事」に於ける「香氣」も又、後続の文より推測をするならば、やはり「五色雲」同様に、吉祥として扱われていたものと推測されるのである。

③「天地振動」とは、如何なる現象であろうか。直訳的には、天地の振動現象であることより、発雷、落雷や、地震をイメージするであろう。但し、この前後の文脈より推理するならば、地震でも雷でもない。「月満將産。天地振動。産得一男」としたその表現法よりは、月満ち、天地の振動現象があった後に鼻荊が生まれたことになるのである。つまり、この振動とは、出産に伴う母体の振動であって、常ではない人間の出生を、天や地より発せられた振動と言う形で予告（警告）した位置付けである。その意味に於いては、「三国史記」中でも多用されて来た、局所的「震動」に相通じる現象であろう。即ち、この振動は実際に発生していたものではなく、この物語を構成する要素、強調用法として挿入されていたものとして見る事が出来るのである。勿論、自然災害ではない。

④「時人作詞曰。聖帝魂生子、鼻荊郎室亭。飛馳諸鬼衆。此處莫留停。郷俗帖（たれる）此詞以辟（さける）鬼」とした行為、習俗よりは、中国由来の、鬼＝災異（を齎すもの）、を避ける「桃符（とうふ）」の習慣を想起させる。桃符は、元々中国に於いて、陰暦元日に、門戸の脇に貼り付ける魔除けの札である。古来、中国ではそうした邪気を払う魔力を桃（或いは、桃核）が持っているものと信仰されて来たことより、魔除けの呪符も桃木で作られることが多かったらしい。これが桃符であり、桃の木板に百鬼を食うとされた神荼（しんと）、鬱壘（うつるい）二神の名や像、吉祥文字を書いたものである。門聯（もんれん。対聯、春聯）の起源とされている。

尚、現在の中国に於いても、小年（正月期間の内、蟬月23日から除夜までの間）の行事として、「貼春聯」がある。春聯とは「門対」、「春帖」とも言

い、**對聯**の一種である。「**春節**」に張ることに依り、**春聯**と名付けられたとされる。

春聯の由来は2つある。1つは「**桃符**」であり、最初は、人々が**桃**の木で人形を刻み、それを扉の両側に掛けて、**魔除け**をする。そして、**桃**の木の板に、門を守る神の画像を描き、最後には、**桃**の木の板に、門を守る神の名前を直接書くのである。他方の由来は、かつて**立春**を迎える際に、「**宜春**」の2文字を書くことが多くなり、それが発展して**春聯**になったとするものである。**春聯**は明朝期より普及し、**陳尚古**の「**簪云樓雜說**」では、或る年、明朝の皇帝**太祖朱元璋**（**洪武帝**）を慶祝する為、どの家でも必ず扉に**春聯**を張らなければならないこととなったとする。

元来、**春聯**は**桃**の木の板に書くものであり、それ以後は、紙に書くこととなった。**桃**の木の色は赤く、赤い色には吉祥と、**魔除け**の意味があったので、**春聯**は殆んどの場合には赤い紙に書かれた。しかし、**廟宇**は黄色の紙を使用し、**喪**に服する時には、白、緑、黄色の三色を使用する。1年目は白い紙で、2年目は緑色の紙、3年目は黄色の紙で行ない、4年目からは赤い紙に戻るのである。「**荊楚歲時記**」⁽²⁾には、**謝道通**が**広東省**にある**羅浮山**（**蓬萊山**の1つとされる）に登った際、数童子が朱字で**桃板**に書して戸上に貼っていたのを見て、帰宅後にそれを真似し、紙に同じ文字を書して戸上に貼った処、鬼がこれを見て畏れたとする記事があることより、**桃板**を使用した**鬼難封じ**の習俗は、少なく共、6世紀頃の**華南**地方では行なわれていたことになる。

こうした**中国風**由来の、鬼を追い払うという思想は、**倭国**へも影響を齎した。それは、「**日本書紀** 卷一 神代上（四神出生）」⁽³⁾に記された、「一書曰。（中略）此用（由）**桃**避鬼之縁也」とする記事に於いて、**伊弉諾尊**が追いかけて来る**八色雷公**（**ヤクサノイカツチ**）に対し、**桃**の実を投げ、**出雲国伊賦夜坂**（**イフヤサカ**）にあったと言う、**黄泉比良坂**（**ヨモツヒラサカ**）の坂本に於いて退けたとする記事として登場し、その**中国**由来の伝承が、「**日本書紀**」成立以前より**倭国**に存在していたことは、その編集の基となった一書の（「**日本書紀**」編纂当時）に於ける）存在に依り、確實視されるのである。

抑々、**中国**西北部、**黄河**の源流域にも近い**陝西**

省～**甘肅省**に及ぶ高山地帯を原産とする**桃**は、既に、**縄文時代**の後期には、**倭国**へ齎されていたらしいが、それは、**祭祀用**、**食用**の他、後には**薬用**、**観賞用**としても使用された。その多子、生命力の強さ、それらより展開した**中国大陸**での政治、恋愛等の象徴的な意味合いを持った果実としての役割、呪術性、**魔除け**、**長寿**、**蟠桃**の**鬼門**といった思想は、植物としての**桃**自体が**倭国**へ渡来する以前より、既に、**倭国**へ伝播していたとされる。⁽⁴⁾

物理的な証拠も発見されている。**奈良県桜井市**所在の**纏向遺跡**大字辻地区に於ける、第168次調査〔平成22年（2010）7月1日～同10月18日実施、調査面積約465平方メートル〕に於いて、調査区の中央より東側で、南北約4.3m、東西約2.2mに渡る、**長楕円形**の大型土坑が発見された。これは、同遺跡中枢部に建てられていた大型建物跡（3世紀前半。南北約19.2メートル、東西約12.4メートル）の南約5メートルの地点に当たる。当該土坑よりは、**稲**、**粟**、そして、**桃**等の栽培植物の種実、花粉といった植物遺存体が出土した。特に、**桃核**は2,765点が出土しており、この様に大量に出土したのは、**食用**の他にも、何らかの**祭祀行為**に**桃**が使用されていたからではないかとされている。**桃核**には、未成熟な個体や、果肉が残存している物もあって、何らかの理由に依り、大量の**桃**を集めなければならない事情があったものと想定されている。後に行なわれた**放射性炭素**（**C14**）年代測定の結果、これらの**桃核**は西暦135年～230年のものであると判定されたのである。⁽⁵⁾

更に、特徴的なのは、**横槌**と**へう状木製品**、**底部穿孔**を施した、**小型の直口壺**以外の全ての遺物が、破壊されており、それらの一部分のみが出土することである。これは、土坑の近隣で、何らかの**祭祀行為**を行った後に、それらの**道具類**を破壊し、土坑まで運搬してから**投棄**したのか、或いは、意図的にそれらの一部分のみを**投棄**したものと推測されている。当該遺物の年代観より、当該土坑は、**庄内3式期**（3世紀中頃）に掘られたものとされ、土坑の北端が、4棟の建物と、柵と考えられている柱列ラインと重なること等から、当該土坑が、建物群の廃絶後に掘削され、**祭祀行為**が行なわれたのではないかと考えられている。⁽⁶⁾

以上の事象より判断し、ここでは、**桃**（の果実）

の持つ呪力で以って、祀られることの無い死霊(鬼)
に依る禍を防ぐとする、中国伝来の信仰に基づき、
桃を使用した祭祀が既に3世紀の段階に於いて、

当所で執行されていたのではないかと推測される
のである。

後掲写真：

兵庫県の淡路島北西部に鎮座する伊弉諾神宮と、そこで頒布されている桃型の絵馬（筆者撮影）。兵庫県淡路市多賀740に所在する伊弉諾神宮に於いて、毎年1月14日宵～15日朝に齋行される、当社最重儀の粥占神事では、桃の小枝の薪で邪気を祓い、粥を炊き上げる。これは稲等の作物の豊凶を占う神事であって、「日本書紀」に記載された、黄泉国に於ける伊弉諾尊と、醜鬼との故事に由来するとされる。(7)





ところで、日本に於ける昔話の一類型で、桃より出生したという男児に就いて語る、「桃太郎」の本来の形は、求婚譚の形式を備えたものであったが、主として、幼児向けに語られる内に、婚姻というモチーフを喪失したとする説もある。又、桃太郎の昔話自体は、既に江戸期の赤本にも見え、明治期以降の教科書にも採用されるが、鬼が島へ鬼退治に赴く冒険話が、成年式の慣習を反映したとする、関敬吾氏の指摘する説もある。⁽⁸⁾ただ、桃を以って鬼を退治するというストーリーが、この昔話に於いて、唐突に出現するというのも、理解し難い。寧ろ、上記の諸事例よりも、その成立の背景には、中国大陸より日本へ伝来した、鬼を巡る思想、鬼を巡る祭祀があったと見るのが自然なのかもしれない。⁽⁹⁾

⑤「一日吉達變狐而遁去。荊使鬼捉而殺之」とする表現よりは、「狐」が鬼を使ってでも退治をしなければならない、忌むべき存在として描写されていることが判明する。確かに、「三国史記」中に在っても、「高句麗本紀 第三」次大王遂成3年（148）7月条に於いて、「王田于平儒原。白狐隨而鳴。王射之不中。問於師巫（ふ、かななぎ。神に仕える女性）。曰。狐者妖獸非吉祥。況

白其色。尤可怪也」と記す様に、狐は妖獸であって、その出現は、鳴き声をも含めて吉兆ではないとされていたのである。本来は吉祥色である筈の白色も、白狐の場合に在っては、それ自体が怪しい出来事（色彩）であり、凶兆として見做されていたことが特筆される。

又、「百濟本紀 第六」義慈王19年（659）条では、「春二月。衆狐入宮中。一白狐坐上佐平書案。夏四月。太子宮雌鷄與小雀交。遣將侵攻新羅獨山、桐岑二城。五月。王都西南泗泚河大魚出死。長三丈。秋八月。有女屍（し、かばね、しかばね）浮生草津。長十八尺。九月。宮中槐樹鳴如人哭（なく）聲。夜鬼哭於宮南路」とし、百濟国滅亡へ向けた様々な変異の発生記事の中に在って、先ずは、多くの狐が宮中へ侵入し、その内、一匹の「白狐」が佐平（第一等官位）叙任の辞令の上に坐した、としている。これは、同17年正月条に記された、「拜王庶子四十一人爲佐平。各賜食邑」記事を受けての、動物を使用した形での批判記事であるものと指摘を行なった。動物に批判者を置き換えた表現手法である。

即ち、義慈王の庶子（嫡子以外の子）41人が同時に佐平に叙任された上、食邑（しょくゆう）

知行所、領地)をも賜与されるという異常事態(乱れた政治、不公平な行ない)に対して、その「佐平書案」の上に白狐が座る➡踏み付ける、行為を以って、それを非難したものであろう。「衆狐入宮中」は、「王庶子四十一人爲佐平」に対応したものと考えられる。白色は、通常、吉祥色であるが、この場合には、佐平叙任という慶事を暗に皮肉ったものであろう。吉祥色と昇任人事という、陽と陽の事象を当てることに依って、故意に文章上で陰陽不調和の状態、即ち、凶なる状況を現出させたものと推測される。従って、国の滅亡と言う観点よりも、白狐の出現も凶兆として見做されているのである。

ただその一方では、前掲「延喜式 卷第二十一」の「治部省一祥瑞一上瑞」に、白狐、玄狐が挙げられており、同中瑞でも赤狐の如く、日本では狐の3事例を祥瑞として挙げているのである。これは一体どう解釈したら良いのであろうか。日本では、稲作に害する鼠の天敵としての狐の存在に着目し、餌付けを行なう等して保護して来た経緯がある。韓半島に於いても、そうした農業経営を巡る状況に関しては、日本と同様であったものと考えられるが、何故、それが「妖獣」として位置付けられたのであろうか。

「新羅本紀 第九」景德王憲英15年(756)条では、「春二月。上大等金思仁以比年災異屢見。(中略)夏四月。大雹。大永郎獻白狐。授位南邊第一」とし、この年2月、「災異屢見」とした状況設定、現状認識の下、同4月にはそうした対災異観に基づき、大永郎が大雹の降下を直接的契機として、「白狐」を王へ献じているのである。ここでは、具体的な災異の内容に就いては記載が無く、不詳ではあるが、「新羅本紀」に在っては、白色の動物を献上したことに依る授位措置の初見記事として見えるのである。この前後の状況より推測するならば、当該「白狐」献上はこの場合に在っては、吉兆として認識をされているものと考えられる。「白狐」のみは、場面設定に依り吉凶両用の使用例が存在したのであろう]

(2) 卷一、太宗春秋公:「第二十九、太祖大王。名春秋。姓金氏。龍樹一作龍春。角干追封文興大王之子也。(中略)七年壬戌(662)。命(蘇)定方爲遼東道行軍大總管。俄攻平壤城。會大雪。解圍還。拜涼州安集大使。以定吐蕃」[「三國史記」

—「高句麗本紀 第十」寶臧王臧(寶臧)21年(662)正月では、同じ個所に対して「左驍衛將軍白州刺史沃沮道總管龐孝泰與蓋蘇文戰於蚶水之上。舉軍沒。與其子十三人皆戰死。蘇定方圍平壤。會大雪。解而退。凡前後之行。皆無大功而退」と記す。高句麗国の最後の国王である第28代寶臧王の治世であり、国の終焉部分を描写した場面である。唐將龐孝泰と、高句麗の將淵蓋蘇文の率いた軍勢は蚶水の地に於いて激突した。龐孝泰軍は大敗して、その子13人も全て戦死したのである。「蚶川之原」の場所は高句麗王に依る狩獵の場でもあった。蚶水という地名よりは、当地に水の存在、取り分け、蚶の這う如き急流となって流下する水の流れをイメージさせると共に、そこが洪水や土石流と言った水災害の常襲地帯であったことをも想起させるのである。

一方、唐の武將であった蘇定方は平壤城へ進出し、そこを包囲するものの、大雪に遭遇した。それに依り、包囲を継続することが困難となり、大した成果も上げることが出来ない中、止むを得ず撤退するのであった。この大雪が、実際にどの程度の積雪であったのかは、「三國史記 卷第四十四 列傳第四 金仁問」にも、「以大雪解圍還」とあるのみで、具体的な積雪量は記載していない。当該「三國遺事」にも、それを推量するヒントは記されていない。「資治通鑑(鑑) 唐紀十六」龍朔2年(662)2月戊寅条に於いても、同様に具体的な記載は無い。

ただ、平壤城の包囲が維持できない様な歩行が困難になる程度の積雪であったものと推測されることより、1メートル程度の降雪があった可能性は推定される。それと共に、強力な寒気の南下に伴う気温の低下も又、軍の撤退を決意させた大きな理由ではあったものと推測される。更に、「三國史記 卷第四十四 列傳第四 金仁問」には「糧道不繼」と記されており、特に兵糧等の補給路の確保が困難となっていたことも、この大雪に依る交通障害であったことを類推させるのである]

(3) 卷二、早雪:「①第四十、哀莊王。末年戊子八月十五日。有雪。②第四十一、憲德王。元和十三年戊戌三月十四日。大雪。一本作丙寅。誤矣。元和盡十五。無丙寅。③第四十六、文聖王。己未五月十九日。大雪。八月一日。天地晦暗(かいあん。薄暗い様子)」[「三國遺事 卷二」では、「早雪」

の項を立てて、季節外れの降雪記事を載せている。

まず、①新羅国第40代目の国王であった哀莊王の末年(哀莊王10年。809年。809年は「己丑」の年であり、「戊子」は808年に当たる)の8月15日、降雪があったとする。但し、「新羅本紀 第十」に於いては、その記述は無い。哀莊王はこの年(809)の7月には、叔父に当たる金彦昇と、その弟であった伊飡の悌邕の起こした叛乱に依って、王弟の體明侍衛王と共に殺害されていたのである。夏季の降雪が事実であったのか、否かは判断が困難ではあるが、この事件を受けての自然的事象(異常な降雪。即ち凶兆)として認識されていた可能性はあろう。

「新羅本紀 第十」では、同8年(807)8月条に「大雪」記事を載せているので、これを指しているものかもしれない。ここでは年次比定の錯綜が見られるが、これが一然(普覚国師)に依る記述間違いであったのか、諸資料の精査に基づく修正作業の結果であったのかは不明である。ただ、旧暦ではあるが、物理的には8月15日に降雪の可能性はあるのであろうか。2007年7月30日の18:00頃、同8月6日の15:00頃には、中華人民共和国の首都である北京市〔7月30日は東三環(環)路付近、8月6日は海澱区付近〕に於いて、短時間ではあるものの、実際に強風と共に降雪が認められているのである。積雪は無かった。夏季に在っても、中央アジア、シベリア方面より、強力な寒気の流入、湿った空気の流入、そして、大気的不安定化等、一定の気象条件が整えば、降雪現象自体は発生するものの、地表付近の温度が高い為、積雪に至るかどうかなかなか微妙ではあろう。況してや、当時としても大雪に至っていた可能性は無いものと推測されるのである。

それでは、この大雪記事記載の意図をどの様に捉えたら良いのであろうか。上述した如く、降雪自体は概して吉兆として見做されていた。従って、「新羅本紀 第十」哀莊王8年8月条に記述された「大雪」事象とは、翌9年2月条に記される「日本國使至。王厚禮待之。遣金力奇入唐朝貢」と言った日本や唐との良好な外交関係を反映させたもの(吉兆)であると見られるのである。

②憲徳王10年(818)〔唐憲宗の元和13年〕3月14日に「大雪」があったとする。何故、当

該箇所のみ唐の年号を用いたのであろうか。憲徳王と唐の憲宗との密接な関係性に鑑みたものであろうか。割書きの部分(「或る本には丙寅とあるがそれは誤りであろうか。元和の年号は15年迄であるが、その中に丙寅は無い」)は、一然に依る見解である。少なく共、②の大雪記事に関しては、その元となる素材の存在していたことが推測できる。

「新羅本紀 第十」に依れば、憲徳王の翌11年7月には、唐の鄆州(うんしゅう。山東省西部地域)節度使であった李師道が叛乱を起こすと、憲徳王はその討平を目指す憲宗の勅旨を奉じ、順天軍將軍金雄元に3万の甲兵(武装した兵士)を託して派遣し、唐を支援していた。当該大雪記事は、そうした新羅国と唐との蜜月関係を大いに吉祥(吉兆)であると判じ、吉祥色である白色に懸けて記載したものであったのかもしれない。「新羅本紀 第十」では、憲徳王の治世に大雪記事を掲載してはいないものの、「二月。雪五尺。樹木枯」(14年)、「有白黒赤三種蟲。冒雪能行。見陽而止」(15年正月9日)、「秋七月。雪」(15年)の3件の雪に関わる記載がある。この内、大雪に該当する事象は14年2月の「雪五尺」であるが、「三国遺事」とは日付が一致しない。

③文聖王の己未の年(元年。839)5月19日に大雪があったとするが、「新羅本紀 第十一」にはその記載が無い。同年8月1日に発生したとされる「天地晦暗」現象が降雪(大雪)に依るものであったのか、その他の理由に伴う現象であったのかは不明である。839年は前代の神武王元年でもあった。「三國史記」に依れば、神武王は同年7月23日に薨去するが、その死因は、王が派遣した騎士に依り殺害されていた侍中の利弘に依って、夢の中で背中を射られたことに伴う瘡(皮膚病)であったとする。従って、同年の5月19日は未だ神武王の治世である。旧暦5月19日にあったとされる大雪も疑わしいが、8月1日に発生したとされる「天地晦暗」現象とは、この処の僖康王〔43代国王。縊死(首を吊って死ぬこと)。治世は3年〕、閔哀王(44代国王。金陽軍の兵士に依り殺害される。治世は2年)、神武王(45代国王。死因は上記。治世は1年)と言う様に、3代続けて国王が非業の死を遂げ、尚且つ、それらの治世が非常に短いという国家的

非常事態を示唆した自然現象として認識されていたものであろうことは、推測される。

その自然現象とは、発生時期より見て、発達した積乱雲（Cb）出現の可能性が有力であろうが、その他にも火山噴火に伴う降灰、皆既日食や金環日食、部分日食等の日食の現象等が考慮される（『新羅本紀 第十一』にはそうした自然現象に関わる記載は無い）。但し、「天地」とあることから、「天」に関わる要因はそうかもしれないが、「地」も薄暗くなっていたとするならば、その物理的な要因は何であろうか。その場合には、火山噴火に伴う降灰が有力な候補となるのかもしれない。新羅国にとって、近隣の火山では済州島の火山群（1002年以前の噴火記録は不明）や、北方の白頭山（946年に最大規模の噴火を起こしている）等が考慮されるものの、839年に於ける噴火記録は見当たらない。済州島は新羅国の南西方向に位置していることから、若し、そこで大規模な火山噴火が発生していた場合には、偏西風に乗り、火山灰が領域へと齎される可能性は大きい。西日本、取り分け、九州所在の火山が噴火したとしても、阿蘇山や鬼界カルデラ等に於けるカルデラ噴火ではない限り、新羅国領域に迄、テフラが到達するのは困難であろう。

前述した様に、降雪自体は、色彩感覚の面よりは吉祥色としての白色の出現であるとして、吉兆として見做されることが多かった。一然がこれら3件の降雪を「早雪」現象であるとして、記事にしたのは、その自然現象自体に対して、それ以外の事象との関連性を認めたからなのかもしれない。哀莊王や憲徳王の場合に在って、それは唐や倭国といった周辺諸国との関係性であった。しかし、文聖王の事例では、到底この大雪が吉祥事例であるとは判断することが出来ないものの、文聖王側の立場に立つならば、新王（46代国王としての文聖王）の出現に依り、上記の如き混乱状態が終息されたという観点では、吉祥であったとすることも出来よう。

季節外れの「大雪」記事は、『三國史記』中に於いても諸所に記述があるが、せいぜい旧暦4月や9月の出来事であった。大雪認識の基準は本書に於ける検証作業より、積雪五尺〔高麗尺（こまじゃく）換算で約178センチメートル〕以上であることが判明している。このことよりも、旧暦

8月に於ける大雪が、実際の自然現象では無かったことが推定されるのである]

（4）巻二、眞聖女大王。居陁知（コタチ）：「第五十一、眞聖女王。臨朝有年（即位してから数年が経過し）。乳母皐好（ふこう）夫人。與其夫魏弘匠干（サツハン。城將）等三四寵臣。擅權（せんけん。專權）撓（みだれる）政（権勢を握り、專制政治を行なった）。盜賊蜂起。國人患之。乃作陁（陀）羅尼（だらに。陀羅尼の呪文）隱語（特定の集団内でのみ通用する語、句）書。投路上。王與權臣等得之。謂曰。此非王居仁、誰作此文。乃囚居仁於獄。居仁作詩訴于天。天乃震其獄囚以免之。詩曰。「燕丹（燕太子丹。中国戦国時代末期に於ける燕の太子）泣血虹穿日。鄒衍（すうえん。中国戦国時代の思想家。齊の人）含悲夏落霜。今我失途（途方に暮れる事、失意）還（また。「今」に対応）似舊（鄒衍の味わった失意に似ている）。皇天（天帝）何（なんぞ）事不垂祥（さいわい）。」陁（陀）羅尼曰。「南無亡國。刹尼那帝。判尼判尼蘇判尼于于三阿干。皐伊婆婆訶。」説者（これを解説した人）云。刹尼那帝者、言女主（眞聖王曼）也。判尼判尼蘇判尼者、言二蘇判也。蘇判（匠干）爵名。于于三阿十也。皐伊者。言皐好（夫人）也」〔新羅国の眞聖女王治世下に於ける、国政や綱紀の混乱、紊乱（びんらん）と、それに対する「天」に関する記事である。

「新羅本紀 第十一」眞聖王曼2年（888）条には、「春二月。少梁里石自行。王素與角干（金）魏弘通。至是常入内用事。仍命與大矩和尚修集鄉歌。謂之三代目云。及魏弘卒。追諡爲惠成大王。此後潛引少年美丈夫兩三人淫亂。仍授其人以要職。委以國政。由是佞倖（ねいこう。王の権威を背景に専横な振る舞いをする）肆（ほしいまま）志。貨賂公行。賞罰不公。紀綱壞弛。時無名子。欺（あざむく。輕蔑する）謗（そしる）時政。構（かまえる。計画する）辭榜（ぼう。立札）於朝路。王命人搜索。不能得。或告王曰。此必文人不得志者所爲。殆是大耶州隱者巨仁耶。王命拘巨仁京獄。將刑之。巨仁憤怨書於獄壁曰。于公慟哭、三年旱。鄒衍（すうえん）含悲、五月霜。今我幽愁、還似古。皇天無語、但蒼蒼（そうそう。薄暗い様子）。其夕忽雲霧震雷雨雹。王懼（恐れて）出巨仁放歸。三月戊戌朔。日有食之。王不豫。錄囚徒赦殊死已下。許度僧六十人。王疾乃瘳（いえる）。夏五月。

旱」とあり、真聖女王に依る悪政の数々を掲載し、その結果、同条では、国政が「佞倖肆志」、「貨賂公行」、「賞罰不公」、「紀綱壞弛」、という状況に陥ったとしている。

当該記事の冒頭部分に記された「少梁里石自行」記事は、これから起こるそうした政治的混乱状況を示唆したものとして位置付けられていた可能性が有る。真聖女王は、当初、角干（伊伐痕）であった金魏弘（王の伯父に当たるとされる）を重用し、不義の男女関係（「通」）にあったらしい。彼が死去した後、真聖女王は「少年美丈夫兩三人」と姦通し、彼らに依る専横、専断を許したのである。眞聖王曼は、王位に在りながらも、宮廷内へ密かに屈強で美形な「少年美丈夫三人」を引き入れて「淫亂」し、彼らに要職を授けて「國政」を委ねたと記述される。この逸話は、日本の奈良時代に於ける孝謙上皇の僧弓削道鏡へ対する寵愛と重用、及び、彼への皇位譲渡計画逸話、及び、宇佐八幡宮神託事件に於ける和氣清麻呂の存在を大いに参照して作成されていた可能性も想定されると指摘したのである。

そうした処、真聖女王は時政を批判していたとして、「大耶州隱者（王）巨仁」を捉えて京都で投獄した。これも側近に依る讒言（ざんげん）に基づいた逮捕であり、冤罪であった。その獄中に於いて王巨仁が獄壁に記した「憤怒書」では、旱害、霜害と言った自然災害の出来と共に、中国戦国期に於ける陰陽五行家であった齊の鄒衍の唱えた説（五徳終始説）を引き合いに出し、今の王には五行何れの徳も無く、その帰結（陰陽不調和）として、「三年旱」や「五月霜」と言った自然災害が起こり、忽ちの内に「雲霧震雷雨雹」という、常ではない自然現象が立て続けに発生したとしているのである。

「少梁里」とする記載も、鄒衍が梁に於いて厚遇されていたことを反映させた記事、その存在を想起させる為の記述であったのかもしれない。「王不豫」と「王疾乃瘳」とは、そうした真聖女王の悪政と「王懼出巨仁放歸」との対応関係より記されたことも考えられるが、王権に対する体面より、朝廷に依る主体的な対策としての「録囚徒赦殊死已下、許度僧六十人」記事を「王疾乃瘳」の前提条件として筆録をしたものと推測されるのである。「日有食之」記事は、「王不豫」や、旱害発生凶

兆であったのであろう。当年夏5月の旱害は、翌3年条に記される「國內諸州郡不輸貢賦。府庫虛竭。國用窮乏。王發使督促。由是所在盜賊蜂起。於是元宗、哀奴等據沙伐州叛」の原因を為したものであろうか。それも眞聖王曼に依る失政の結果として位置付けられた可能性があろう。

一然（普覚国師）は、「新羅本紀」には無い、国政の乱れに依って「盜賊蜂起。國人患之」とした災厄（治安の悪化）が人民へ降り懸かっていたとする記事を載せ、更に、「辭榜」が「陀（陀）羅尼隱語書」であったとしている。そこには宗教者として、仏教に於ける慈悲思想や、読誦するだけで種々の功德を得られるとされるサンスクリット語の呪文の存在等を指摘し、こうした国家異常事態に際して、仏説に従った形での「正しい歴史観」を反映させていたことが窺われるのである。「陀（陀）羅尼隱語書」を路上へ投げ捨てたとされる王居仁が詩作して身の潔白を訴えた先は「天」であり、そうした彼を、京獄より解放したのは「天乃震」であった。

又、彼が自作の詩「燕丹泣血虹穿日。鄒衍含悲夏落霜。今我失途還似舊。皇天（天帝）何事不垂祥」の中に於いて、秦との抗争に在って殺害された燕太子丹の流した血の涙が、虹となって太陽を貫くとか、陰陽五行思想を整理した齊の鄒衍が、悲観的な将来予測から、夏に降霜させた、とする記述は、人間が生活をする「地」の在り方に対して、「天」の存在の重大性を改めて認識させる意図が含まれていたものと推測されるが、その調和が「地」の側に依って一方的に乱された場合には、そうした「天」に依る警告＝災異、の出現する可能性を示唆するものである。

「泣血虹穿日」とは、前漢末期の劉向（りゅうきょう）編に関わる「戦國策 卷七 魏下 景（閔）王」⁽¹⁰⁾に見られる、「夫專諸〔せんしよ。春秋時代呉の公子光（後に呉王闔閭・こうりょ）の側近となり、呉王僚を暗殺した〕之刺王僚也。彗星襲月。聶政（せつせい、じょうせい。戦国時代の人。刺客）之刺韓傀（かんくわい。戦国七雄韓の宰相俠累）也。白虹（はつこう）貫日。要離（えうり。石要離。刺客）之刺慶忌（けいき。春秋時代末期呉の公子）也。倉鷹（さうよう）擊於殿上。此三子者。皆布衣（ふい。官位の無い人）之士也」を意識した表現法であろうが、「白虹」は武器、「日」は統

治者を表現したものとされ、叛乱を示唆する天象とされた。真聖女王治世下に於いても、このまま事態を放置するならば、そうした状況に立ち至ることを、「天」との関係性の中に於いて説明をしようとしたものであろう。「白虹」では無く、「泣血」が太陽を穿つとは、容易ならざる事態であった]

(5) 卷三、原宗(法興王。新羅国の第23代国王。～540年) 興法。距訥祇(訥祇麻立干。同19代国王) 世一百餘年。冒犬(1字) 罽(イチ) 滅身(殉教する): 「新羅本記。法興大王即位十四年(527)。小臣異次頓(厭罽) 爲法(仏法) 滅身。(中略) 元和(唐憲宗の年号) 中(806～820年)。南潤(王は月) 寺沙門一念撰罽香墳禮佛結社文。載此事甚詳。其略曰。(中略) 粵(ここに) 有内養者(修行者)。姓朴字冒犬(1字) 罽。或作異次。或云伊處。方音(方言) 之別也。譯(翻訳する) 云冒犬(1字) 也。罽、頓、道、靚(と。見る)、獨等皆隨書者之便。乃助辭也。今譯上不譯下。故云冒犬(1字) 罽又冒犬(1字) 靚等也。其父未詳。祖阿珍宗郎。習寶葛文王之子也。新羅官爵凡十七級。其弟四曰波珍喰。亦云阿珍喰也。宗其名也。習寶亦名也。羅人凡追封王者。皆稱葛文王。其實史臣亦云未詳。又按金用行撰阿道碑。舍人時年二十六。父吉升。祖功漢。曾祖乞解大王。挺(抜き) 出而爲質(才能)。抱水鏡而爲志。積善曾孫。望宮内之爪牙(そうが。頼りになる臣下)。聖朝忠臣。企河清(聖王の時代) 之登侍(侍臣となる)。時年二十二。當充舍人。羅(新羅国) 爵有大舍小舍等。蓋(けだし。大よそ) 下士之秩(下士級である)。(中略) 王曰鸞鳳(らんぼう、らんほう。空想上の鳥である鸞鳥と鳳凰) 之子。幼有凌霄(りょうしょう。志が高いこと) 之心。鴻鵠(こうこく。鴻(おおとり) と鵠(くぐい)。英雄) 之兒。生懷(生来) 截(きる) 波之勢。璽得如是(お前もその様だ)。可謂大士(だいじ)。本來は道心堅固な僧、菩薩を言う) 之行乎。於焉(これ) 大王權(はかる) 整威儀。風刀東西。霜仗南北。以召群臣。乃問。卿等於我。欲造精舍。故作留難(故意に作業を遅らせている)。郷傳云。罽〔冒犬(1字) 罽〕爲以王命、傳下興工創寺之意。羣臣來諫。王乃責怒於罽。刑以僞傳王命。於是羣臣戰戰兢兢(きょうく。恐れてびくびくする)。僣(そう。くるしむ) 伺(とう。つつしむ) 作誓。指手東西(誓約の表現法)。王喚舍人而詰(問い

詰める) 之。舍人失色。無辭(ことば) 以對。大王忿怒。勅令斬之。有司縛到衙下。舍人作誓。獄吏斬之。白乳湧出一丈。郷傳云。舍人誓曰。大聖法王。欲興佛教。不顧身命。多却(しりぞく) 結緣。天垂瑞祥。遍示人庶。於是其頭飛出。落於金剛山頂云云。天四黯(あん。暗い) 黦(さん。薄青暗い)。斜景(斜陽) 爲之晦明(かいめい。闇と光)。地六震動。雨花爲之颺落(ひょうらく。落ちる)。聖人哀戚(あいせき。人の死を悲しんで悼む)。沾(うるおす) 悲淚於龍衣(龍袍。国王が着用する衣服)。家宰(宰相) 憂傷(ゆうしょう。憂い悲しむ)。流輕汗於蟬冕(せんべん。臣下が着用する蟬の羽の付いた冠)。甘泉(かんせん。美味しい水の湧き出る泉) 忽渴(かれる)。魚鼈(ぎょべつ。魚やすっぽん。食品等で生活に利用される水産動物) 爭躍。直木(真っすぐに立っている木) 先折。猿猱(どう。アカゲザル) 群鳴]

〔新羅国の法興王治世下に於ける仏教受容、寺院の建立を巡る殉教者の逸話である。「郷傳云」とした表現法が複数個所見られることから、一般的に伝えられていた伝承〔南潤(王は月) 寺の沙門一念が撰述した「罽香墳禮佛結社文」〕の他にも、一然等がその場所に赴いて、そこに伝わる所伝等を採集していたことも考えられる。法興王は冒犬(1字) 罽(厭罽。史料中では「舍人」との問答の中で、聖朝の忠臣と目されていた厭罽が、王に依る精舍(仏教寺院) 造立の意向を群臣に正しく伝えなかったものか、又は、群臣が厭罽に対してそのことを思い止まる様に王を諫めさせたことが原因で、厭罽は王の怒りに触れて斬られる設定となっている。王命を受けた獄吏は舍人を縛り上げ、斬首したのである。

そうした処、白乳が高さ1丈(丈は尺の10倍) に迄、湧出したとする。噴出したのが、首が切り落とされた切り口からであったのか、地面からであったのかは推測することができない。尚、日本語の中では、「白乳」の語の運用は一般的には見られない。⁽¹¹⁾ この「白乳」が何であったのか、或いは、想像上の物質であったのかは判然としないうが、「白乳」(の噴出) が示唆している事象とは、一体何であろうか。普通であれば、斬首であることより、大出血→赤色の色彩認識(凶兆)、であろうが、敢えて白乳とした理由として想定されることは、白色=吉祥色、であることから、その大

量湧出とは祥瑞に他ならない。

即ち、厭禰とは、無論、実在の人間ではなく、空想上の人物であると共に、英雄伝に見られる様な、民衆より待望論を以って受け入れられる存在である。人ではないのである。ここで言う処の吉兆とは、大教（仏教）の新羅国への拡散である。

割書き部分には、「其頭飛出。落於金剛山頂」とあり、斬首された厭禰の頭部は空中を飛行して金剛山（朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の境界線付近、北朝鮮側江原道太白山脈の山）の山頂に落下したとある。金剛山は羽衣伝承（8人の仙女が天より地上に舞い降りて来て水浴びをし、その内の仙女とそこにいた誠実な男性とが結ばれて幸福に暮らしたとする内容）の一形態としての所伝を残す上八潭（8つの淵からなる）、金剛山を守護した9匹の龍が住んでいたとする九龍淵（深さ約13メートルの滝壺）・九龍瀑布（外金剛九龍の滝。滝の高さ約74メートル、幅約4メートル）等、その後に於いて日本へも影響を与え、又は、日本海沿いルートで海人集団に依って伝播したことも考えられる「水（災害）」に関わる伝承や、考え方の原型、遺跡地が残されている霊妙な山である。

日本に於いても、平安時代前半期に発生した承平、天慶の乱（931～941年）で敗北した、関東の住人平将門（たいらのまさかど）の首級は平安京に送られ、京内で曝（さら）されたとしているが、その首は生きている様に喋り、関東を目指して飛び去ったという。現在でも、東京都千代田区大手町1丁目に在る「将門（首）塚」や、彼を三之宮祭神とする神田明神（神田神社。東京都千代田区外神田2丁目）の存在に見られる様に、将門は謀反人でありながらも、律令制度の変容に苦しめられていた民衆の声を代弁したとして、崇敬の対象とされているのである。

そして、厭禰の斬首後、様々な（自然）現象が発生した。先ずは①「天四黯黹。斜景爲之晦明」とした「天」に関わる異変である。「天四」とは四時の天〔蒼天（そうてん。春の空）、昊天（こうてん。夏の空）、旻天（びんてん。秋の空）、上天（じょうてん。冬の空）〕のことではなく、ここでは東西南北の方向性（四方）を表しているものと推測される。空は薄青暗くなり、斜陽は闇と光のコントラストをつけたのであった。闇となった天空か

ら地上へ差し込む光は、天上界、天帝、天神よりの警鐘として認識された災異であったものと考えられる。

②次いで、「地六震動」とした地盤の震動があった。これが地震をイメージしたものであったのか、局所的な振動であったのかは不明であるが、①に対応した地祇よりの警告としての災異である。筆者が「三国史記」―「新羅本紀」を素材として行なった分析では、地震記事の多さが際立った。⁽¹²⁾新羅国は韓半島の中に在って、当時としても地震多発国であったものと推定される倭国に一番接近していたという物理的理由に依り、王都である金城（慶州市）を中心とした地域に於いて、少なからざる地震と、それに伴う震災記事が散在している。

これらの地震が、如何なる発震機構に依って発生していたのかに就いては、地震学分野よりの検証作業が必要となるものの、慶州市付近では、梁山断層（北北東―南南西走向で約200キロメートルに及ぶ）を始め、南北―北北西・南南東走向の蔚山断層系（約40キロメートルに及ぶ）は、慶州市付近で梁山断層系と接触しているが、当該地域では、ほぼ南北方向の走向を持つ活断層の存在が、複数認められているのである。

近年に於いても、2016年9月12日に発生した、所謂、「慶州地震（韓国南東部地震）」（東経129.227度、北緯35.769度を震央としたモーメントマグニチュード5.4の地震）では、負傷者22名等の人的被害も発生している。更に、2017年11月15日の日本時間14時29分頃には、韓国南東部、慶尚北道浦項付近を震央としたマグニチュード5.4の地震が発生し、大学修学能力試験の延期を始め、物的被害も起こっているのである。

但し、～古代に至る時期に在っては、「震動」記録の全てが地盤の揺れを意味する地震では無かつたらしいことが、筆者の検証作業に依り既に判明している。⁽¹³⁾それらの、地震ではない「震」記録は、何らかの事象に対する予兆、事前警告、取り分け、「凶兆」を示していたらしい。その意味に於いては、史料に対する慎重な精査が必要とされるであろう。「泉湧」記事、恐らくは地盤の「液状化現象」を伴っているものに就いては、実際の地震であったものと推測されるが、これらは勿論、当時としても、倭国と比較して地震の相対的

な発生回数が少なかったものと考えられる韓半島に在っては、何らかの事象の「凶兆」として、記録上は利用され、演出されていたことが想定されるのである。

天体、天空や地面に対する変化、異常意識が大変敏感であった当時の社会に在っては、地面が激しく揺れ動く自然現象に対して、現在でもそうである様に、言い知れぬ不安感を持っていたことは、容易に推測を行なうことが可能である。そうであるからこそ、地上側に暮らす人間に依る良くない行為が、何らかの地下神、地祇の怒りを買ひ、人間を懲罰する為に地震を発生させるものと考えていたものと推測される。更に、地震発生と天体運行の異常とを関連付け、そうした災異としての地震は、地震多発国である倭国の方角より齎される災異であるものと認識をしていた徴証も認められたのである。

又、「震」表現法は、「災」表現法と対応関係にあった可能性が有る。「震」は建築物等に於ける物理的な震動や振動を伴っていた現象であった、或は、実際にはその様な物理的な現象は発生していなかったにも拘わらず、発生していた様に認識され、見做されていた表現法であり、人々に対する天神地祇、祖先神等に依る警告として認識された事象であったものと考えられる。「災」はその警告度が一步増幅され、神々の怒りを表現した災となって出現したものであったのかもしれない。取り分け、「震」表現法に関しては、それが易に於ける八卦の1つでもあり、算木を用いて、☳の形で表わし、自然界に於いては「雷」を表わし、方角性では東に配することがある。「震」はこれから陽気が始動しようとする象（かたち）を表わしていることより、季節では春を示し、変革の節目に出現する文語表現法であったのであろう。

以上のことから、「地六震動」現象も、実際の地震ではなかったものと推測される。「地六」の「六」とは「六合（くに、りくごう）」を表現したものであろう。「六合」は東西南北、上下方向の6つの方角（六極）であり、ひいては、天下や世界、そして、全宇宙を表す方向概念でもある。「地六震動」は、正に今が変革の節目であることを示した文語表現法であらう。その意味に於いては、吉祥であると判断される事象である。仏教興隆の前兆としての震動である。

③「雨花爲之飄落」として、降雨が記される。「雨花」とは雨を綺麗に見せる修辭的表現法であるのかもしれないが、雨の如く花びらが降って来る、という意味に於いて解釈することも出来得る。しかし、「飄落」とは、ただ落ちる状態のみを示すものではなく、風波に依って漂い、流離（さすら）うニュアンスをも含む語である。従って、この連文節は、夢（はかな）さ、寂しさをその根底に含んでいる。「雨花」は厭濁の置き換えであり、「雨花爲之飄落」とは、大士と見做されていた彼の死が非常に惜しまれることを表現したものである。法興王に依って齎された道理の無い処刑（災異）で、枢要な人材を失ったという悲嘆や喪失感を表わすと共に、後続の部分では「此之扶（たすける）丹墀（たんち。宮殿の前にある朱色の階段。ここでは新羅宮廷を指す）之信力（信心、信仰力）。成（成就した）阿道之本心（本願）。聖者（厭濁を指す）也」と記述していることから、仏教導入に際した初の殉教者として厭濁を位置付けるのである。「雨花」とは、「聖人（法興王）哀戚。沾悲淚於龍衣」とした法興王の流した涙雨でもあった。

日本では、天正19年（1591）に茶人であった千利休が、関係の悪化していた豊臣秀吉に依って切腹を命じられ、その死後に於いて「利休鼠の雨が降る」という表現法がなされたものと考えられる。千利休に依る遺恨としての、濃い鼠色の雲から降る涙雨である。「利休鼠」（利休色）とは濃茶色のことであり、江戸時代を通じて発令されていた奢侈禁止令の布告が契機であるとされ、江戸時代に町人に依り生み出された茶色、鼠色系統色の総称である四十八茶百鼠（しじゅうはっちゃひゃくねずみ）の1つでもある。北原白秋が作詞をした「城ヶ島の雨」の冒頭部に於いて、「雨はふるふる城ヶ島の磯に利休鼠の雨が降る」と書かれたことに依り、「利休鼠」は広く知られる様になった。「利休鼠の雨が降る」とする表現法自体が、千利休の切腹直後に於いて既になされていたのか、否かは判然とはしないものの、そこには影響力のある人物の不合理的で非業の死に際して示された、天よりの警鐘としての暗雲の出現と、降雨という共通項を見出すことができるのである。

茶聖であった「利休」の呼称を使用した語は、「利休揚」、「利休色」、「利休形」、「利休下駄」、「利休好」、「利休小紋」、「利休信楽」、「利休筆筭」、「利

「休茶」、「利休蔦」、「利休梅」、「利休箸」、「利休花菱」、「利休藤」、「利休牡丹」、「利休髷」、「利休焼」、「利休流」等の如く非常に多く運用がなされている。「利休」単体では、「愚かなこと」、「愚かな様子」とする否定的な意味、用法でも使用されており、⁽¹⁴⁾「長い物には巻かれろ」という慣用句には該当しなかったであろう利休の死に対する、一種の揶揄としての意味用法もある。

こうした（怨恨や強い信念を以って死んだ）人の死と、色彩とを関連性あるものとして位置付ける試みは、東アジア世界に共通して認められる現象であるのかもしれない。

④「甘泉忽渴」として、飲用に適した泉の美味な水が枯れたとしている。筆者が、「三国史記」—「新羅本紀」を素材として行なった分析結果に依るならば、韓半島に於いては、自然災害の中でも、旱害に関する記事の多さが特筆された。⁽¹⁵⁾旱害は時期的に見ると、春季～夏季にかけての時期に出現することが多いが、その状態を解消させる為、王権に依って祈雨の祭儀が執行されていたことを指摘した。日本古代の如く、「遍祈山川」と言った自然祭祀の手法が採用されていたことも特徴的である。古記録上、半島に在って旱害の出現頻度は、日本よりも著しかったことが窺われる。その為、堤防や、碧骨堤の如き溜池等の治水工事（技術）は進歩していたのである。水不足は米、冬小麦、豆類等、農業への打撃が大きく、飢饉の発生に直結することから、王権にとっても看過することのできない自然災害なのである。

但し、この場合の「甘泉忽渴」現象は、泉の水が忽ちの内に涸れてしまったとしていることよりも、通常起きる旱害に依るものではないことが窺われる。即ち、地より齎された懲罰としての水の遮断である。これは、直前に記されている「雨花爲之颺落。聖人哀戚。沾悲淚於龍衣。家宰憂傷。流輕汗於蟬冕」に対応している事象であるものと考えられ、こうした雨花、悲涙、輕汗といった液体の放出に依って、それらの供給源としての水が涸れてしまったとする文脈である。

又、「甘泉」より湧出する水は「甘露水（かんろすい）」であり、「甘露（かんろ）」である。甘露とは、元々、古代インドに於ける甘い飲料（古代のインドにあったとされる植物ソーマより造られたソーマ酒に見倣された）であり、仏教興隆後

は釈迦の教えにも準えられた。それは飢渴を癒し、苦悩を除き、不老不死となり、死者をも復活させる天人の食物、天酒であるとされた。仏教に於いては、世界の中心に聳（そび）える須弥山（しゅみせん）の山頂に存在するとされる三十三天の不死の靈液を指す。それには煩惱を解消する作用もあるとされる。

道家の開祖である老子の「老子 道経 上」—「聖徳 第三十二」には、「道常無名。朴（ほおのき。モクレン科の落葉高木。折ったばかりの新しい木）雖小天下不敢臣。侯王若能守之（道のこと）、萬物將自賓（天下の万物は自然と敬服し従う）。天地相合以降甘露（天地の気は調和して、瑞祥としての甘露の雨を降らせる）、民莫之令而自均（人民は命令されることが無くても自然と均等に恩恵を受ける）」⁽¹⁶⁾とあって、中国では天子が仁成を敷いた時に、天地陰陽が調和し吉兆であることを天下に知らしめる為に、天より降らせた甘い液体を甘露と称したのである。老子が説いた無為自然の結果（成果）として降るものが甘露であった。

つまり、「甘泉忽渴」現象とは、天地の陰陽不調和の状態が招いた災異なのである。それは、仏教の受容を巡る新羅国国内に於ける不協和音、崇仏派（法興王）と排仏派（群臣）との意思疎通の不備、対立こそがそうした不調和の状態を出現させた主原因であり、その犠牲になったのが厭鬱であったとするストーリーである。

⑤「魚鼈爭躍。直木先折。猿獠群鳴」として、動植物に関する異変を列挙する。「三国遺事」、「三国史記」の記事中でも、動植物の異変、特異な行動に関する記述は多くなされている。先ず、「魚鼈」に関した記述は、「三国史記」—「高句麗本紀」にのみ多く見られる。「高句麗本紀 第一」始祖東明聖王朱蒙（鄒牟、衆解）即位前紀には、「朱蒙乃與烏伊、摩離、陝父等三人爲友。行至淹淲水。一名蓋斯水。在今鴨渌東北。欲渡無梁（はし）。恐爲追兵所迫。告水曰。我是天帝子。河伯外孫。今日逃走。追者垂及如何。於是魚鼈浮出成橋。朱蒙得渡。魚鼈乃解」とあって、高句麗国の建国神話中に、朱蒙等4人が逃走途中に於いて、淹淲水を渡河しようとした際に橋が無く、追手の兵が迫って来た時に、「魚鼈」が浮上して船橋の如く梁（橋）の代わりとなり、4人の渡河後にはそれを解いて、追手の兵を退けた、とする逸話が記される。ここ

には「水」との関りが濃厚な「浦島伝承」の原型、類型の存在をも窺うことが出来るのである。「告水曰」とする記述よりは、朱蒙（高句麗王権）が「水（中）」の支配と大きく関わっていたことを想起させる。⁽¹⁷⁾

又、同記第一、琉璃明王類利（孺留）21年（2）条にも「春三月。郊豕逸。王命掌（つかさどる）性薛（せつ）支逐（おう）之。至國內（国内城。中華人民共和国吉林省集安市）尉那巖得之。拘（とらえ）於國內人家養之。返見王曰。臣逐豕至國內尉那巖。見其山水深險。地宜五穀。又多麋（おおじか）鹿魚鼈之産。王若移都。則不唯（ただに～のみならず。ただ～のみではない）民利之無窮（むきゅう。無限、永遠）。又可免兵革之患也」と記される。国内城の適性とは、「山水深險。地宜五穀。又多麋鹿魚鼈之産」や「可免兵革之患」であるとする。つまり、（鴨緑江沿岸部と言う地域特性を生かした）水の確保、峻嶒な地形に依る外敵よりの防御性の確保、土地が肥沃であること、そして、麋、鹿、魚、鼈等の生物が多く生息していることであつた。それらの生き物が必ずしも食用だけの用途ではなく、祭祀用としても必要であつたからであろう。

亀は、韓半島に於いても、亀趺（きふ。石碑等の台座に用いられる亀形の石）としても使用される等、社会的な地位や、官僚制的身分秩序を示す標識としても使用された。但し、亀趺自体は中国（発祥は後漢期であるとされる）より伝播した習慣である。五行説に依れば、五獣の玄武は五虫の介（亀）に当てられており、四神としての玄武は、通常、亀の姿に描かれることが多い。古代の中国に於いては、亀は長寿や不死を表わし、蛇（龍）は子孫繁栄の象徴として見られ、陰陽調和の典型として在つたのである。それ故、亀の異変（「争躍」）とは、即ち、陰陽不調和の状態を示し、国家衰亡の凶兆でもあつた。

そして、「直木先折」現象が意味していることとは、一体何であろうか。「折木」現象は、「三国史記」中に於いても屢々（しばしば）見られる表現法である。それらは、「大風折木」、「大風東來。折木飛瓦。至夕而止」、「暴風折木蜚（飛）瓦」、「大風拔木」、「暴風拔木」等といった表現法で示されており、強風の結果として記されることが殆どである。それ自体は、事実であつた可能性もあるが、

大抵の事例に於いては凶兆として位置付けられることが多いのである。そこに生えている「木」とは、王権や王自身の存在を表現したものであると考えられる。又、「折」の動詞には、折る、折れる、くじけるという訓読法があり、減勢される、死ぬ、等の語義、用法がある。「拔」の動詞にも、抜く、抜かず、抜ける、といった訓読法があるが、攻略する、攻め取る、とした意味、用法もあり、何れも王権に対する消極的、否定的な場面設定の中で使用されていたものと推測されるのである。

従つて、「直木先折」現象にも、否定的なシーンを創出するという機能が認められて良いであろう。それは仏教導入を巡る群臣との確執であろうか。

更に、「猿獠群鳴」現象は、サル類が群れで鳴いたとするものである。実は、「三国史記」中にはヒト以外の霊長類に関する記述は殆ど見受けられない。それは韓半島に於いて、広義のサル類の生息が余り多くはないという事情もあつたものと考えられる。かつての半島には、アムールトラ（虎）、ヒョウ（豹）等の大型ネコ科動物が生息しており、気候要因ではなく、こうした天敵の存在に依つて、サル類も次第に個体数を減らして行つたものかもしれない。この場合の「猿」も「獠」の語も「さる」と訓読することができる。

鄭高咏氏に依れば、⁽¹⁸⁾サルを表現した漢字で最古のものは「猴」であり、既に3,000年以上前の甲骨文に見えていると指摘をする。それは後世に於いて、「𠙴」（náo）とも「獠𠙴」（náoáo）とも呼ばれるとしている。そして、「獠」は「母猴」や「沐猴」の異名を持つ「獠猴」（アカゲザル）であり、「獠」は「獠猴」（テナガザル）とし、「獠」の方は殷代に狩獵の対象とされていたとしている。「𠙴」の語は「高祖𠙴」という殷王朝の始祖の名にも当てられ、一方の「獠」の語は狩獵の獲物を表わし、「獲獠（獠狩り）」という言葉も行なわれていたという。

それに加えて、「猿と猴では進化の程度に差があり、一般的には尾があるのが猴、ないのが猿とされているものの、それはあくまでも生物学上の区別に過ぎず、十二支文化の「申」は狭義のサルではなく広義のサル、すなわち「猿」（類人猿）、「獠」，「獠」（アカゲザル），「獠」（オオザル的一种），「獠」（テナガザル），「猩猩」（オランウータン），「禺」（オナガザル），「獠」（キヌザル），「然」（オナガザル），「果

然”(オナガザル)、“獼猴”(サルの別名)、“狒狒”(ヒヒ)など、霊長類のうちサルと目されるものすべてがその範疇に入る。この現象は中国の極めて広い地域で多くの原始部落が 各種各様の「サル崇拜」を行っていたことの表れだ。」と述べている。そうであるとするならば、「猿猱」とは、必ずしもニホンザルに似たアカゲザルのみを指した表現法ではなく、広くサル類一般を指した言い方であった可能性が高い。当時、既に韓半島に在ってサル類そのものの存在、目撃事例が珍しかったとするならば、その(目には見えない)「群鳴」現象は、人々の認識では異様(恐怖)に映ったに違いない。

抑々、動物を始めとした事物や自然(現象)等の「鳴く」、「鳴る」とした対音声認識が、音声を使用した形での何らかの警鐘であるとして、殆どの場合に於いては否定的なシーン、凶兆を示すものとして使用されていたことを考慮するならば、ただでさえ珍しいサル類の「群鳴」現象は、異常事態の出来を示唆した事象であると見做されていたと考えることができるであろう]

2: 飢饉、蝗害、疾病、賑給、動物、治水、天文、その他の災害

ここでは、「三国遺事」に見られる飢饉、蝗害、疾病、賑給、動物、治水、天文等の記事を検証する。先ず、当該記事を時系列的に抽出し、掲出する。尚、同年中の記事に就いては、最初に記される災害種に依り分けをし、因果関係を考慮する為、複数の種類の記事を掲出した場合もある。

(1) 卷一、太宗春秋公:「第二十九、太祖大王。名春秋。姓金氏。龍樹一作龍春。角干追封文興大王之子也。(中略)現(顯)慶(唐高宗)四年己未(659)。①百濟烏會寺亦云烏合寺。有大赤馬。晝夜六時遶(めぐる)寺行道。②二月。衆狐入義慈宮中。一白狐坐佐平(一品官。財政、典礼、軍事、司法等を管轄する枢要な官)書案上。③四月。太子宮雌鷄與小雀交婚。④五月。泗泚(泚)。扶餘江名。岸大魚出死。長三丈。人食之者皆死。⑤九月。宮中槐樹(えんじゅ)鳴如人哭(なく)。夜鬼哭宮南路上。⑥五年庚申春二月。王都井水血色。西海邊小魚出死。百姓食之不盡。泗泚水血色。⑦四月。蝦蟇(がま。ヒキガエルの俗称)數萬集

於樹上。王都市人無故驚走。如有捕捉。驚仆(たおれる、ふす)死者百餘。亡失財物者無數。⑧六月。王興寺僧皆見如舡(こう。船)楫(しゅう。かじ、櫂)隨大水入寺門。⑨有大犬如野鹿。自西至泗泚岸。向王宮吠之。俄不知所之。城中群犬集於路上。或吠或哭。移時而散。有一鬼入宮中。大呼曰。百濟亡、百濟亡。即入地。王恠之。使人掘地。深三尺許。有一龜。其背有文。百濟圓月輪、新羅如新月。問之。巫者云。圓月輪者滿也。滿則虧(かく、かける)。如新月者未滿也。未滿則漸盈(みちる)。王怒殺之。或曰。圓月輪盛也。如新月者微也。意者國家盛而新羅衰微乎。王喜。太宗(新羅国の武烈王)聞百濟國中多恠變。(顯慶)五年(660)庚申。遣使仁問請兵唐」[新羅国の第29代国王であった武烈王(金春秋。在位期間は654～661年)の項に記された数々の災異記事である。但し、その内容は西隣した百濟国の終焉に付随して発生していた災異であり、しかも、その殆んどが、上述した「三国史記 百濟本紀 第六」義慈王15年(655)、同19年、同20年条に於いて既に記載の為されていたものである。「百濟國中多恠變」とは、正に王自身に依って齎された国家的災異であると評価をすることが出来るのである]

当該史料は、既に、筆者に依る先行論稿「国の終焉と災異記事 —『三国遺事』に見る百濟国の崩壊予兆—」[『融合』(中央大学学外大学教授白門会)第30号所収、32～36頁、2019年2月]に於いて検証済みであるので、史料の掲出のみに留める。尚、本項に対する内容検証をも含めて、小林健彦『災害対処の文化論シリーズ VII 韓半島における災害情報の言語文化 ～三国遺事にみる災害対処の文化論～』[単著書、販売: シーズネット株式会社、2019年10刊行予定]に於いて掲載を行なう。

(2) 卷一、太宗春秋公:「第二十九、太祖大王。名春秋。姓金氏。龍樹一作龍春。角干追封文興大王之子也。(中略)王(新羅国の武烈王)師(いくさ)定百濟。既還之後。羅王(新羅国の武烈王)命諸將追捕百濟殘賊。屯(たむろ)次于漢山城(百濟国)。高麗靺鞨二國兵來圍之。相擊未解。自五月十一日[「三国史記」—「新羅本紀 第五」太宗武烈王8年(661)条では「九日」とする]、至六月二十二日。我兵危甚。王聞之。議群臣曰。計將何出。猶豫(かねて)未決。庾信(金庾信、きんゆしん。

新羅国の官人、武人。595～673年) 馳奏曰。事急矣。人力不可及。唯神術可救。乃於星浮山、設壇修神術。忽有光耀(かがやく)如大瓮(おう。水瓶)。從壇上而出。乃星飛于北去。因此名星浮山。山名或有別説云。山在都林之南。秀出(しゅうしゅつ。抜きん出ること)一峯是也。京城有一人謀求官。命其子作高炬(きよ。松明)。夜登此山攀之。其夜京師人望人皆謂、恠星現於其地。王聞之憂惧(ゆうぐ。心配して恐れる)。募人禳(はらう。災異を祓う)之。其父將應之。日官奏曰此非大恠也。但一家子死、父泣之兆(きざし)耳(のみ。限定、強調用法)。遂不行禳法。是夜其子下山。虎傷而死」[新羅国武烈王の項に記された、百済国滅亡後に於ける、その残党掃討作戦中の逸話である。

新羅軍は、かつての百済国の王都であった漢山城(南漢山付近であったとされる)に布陣していた際、高句麗国(将軍惱音信)と靺鞨(将軍生偕)連合軍に依り周囲を包囲されてしまい、約40日に渡って籠城せざるを得なくなった。新羅軍は窮地に追い込まれたのである。そこで、金庾信は人知、人力に依る解決法は無理であることから、神術で解決を図る様、王に進言した。王は庾信の言を受け入れ、星浮山に「壇」を設けて自ら神術修法を行なった処、忽ちの内に大瓮の様な発光があり、それが壇上より北の方角に向けて飛び去ったのである。「乃星飛于北去」とは、「高麗靺鞨二國兵」を彼らの本拠地である北方領域へと追い払うことを示唆した現象として認識されたものであろう。割書き部分にある「恠星」も、「高麗靺鞨二國兵」の置き換え表現法であろう。

壇を設け、王自らが天地に祈りを捧げる行為に関しては既述した通りであるが、例えば「祭天地於南壇」記事〔三國史記〕―「百濟本紀 第二」古尔王14年(247)正月条〕は、百済国の第8代国王であった古尔王自らに依って執行された天地を祀る祭儀であろうが、前年の夏には、「大旱。無麥」とした出来事があり、この祭儀はそれを受けて執行されたものであろうと指摘を行なった。そうであるとするならば、その目的は降水を祈願することである。「南壇」と表現された南の方角性には、北極星を背にして地上の支配を行なうとした、中国風の「天子の南面思想」の反映が有ったものと考えられる。

当該事例に見られる様に、周囲の土地よりも人

工的に高くした「壇」を築造する形式での祭儀の多くは、少なく共、韓半島に在っては天地四方の神を祀る祈雨祭儀であった可能性が高いものと推定される。抑々「壇」とは、古代中国に於いて、祭祀、朝会、盟誓、封拜等の儀礼を執行するのに際し、平坦な地上部分に設えられた土築構造の高くなっている露臺を指す。古代以来、皇帝は特に壇を築いて犠牲を供え、柴を燔(た)いて丁重さを示し、自ら天神を祀る祭祀を執行したのである。歴代の皇帝は、天命を受けて政を敷く地上側の「天子」として、上帝を祀り、その功德に報ずる祭儀を行なっていたのである。「大壇」は、その為に必要な王権権力、権威を演出する場、即ち、ステージでもあった。

山林川谷丘陵等で雲、風雨や怪しい出来事を発生させ得る能力を持つ者は全て「神」であり、天下の為政者はそうした「百神」を祀り、諸侯に於いては、その地の神を祀らなければならないとしていた。その際の重要な舞台となるのが「壇」なのである。そして、これらの壇を設け、天地、山川を祀る祭儀は、韓半島経由で、倭国へも伝播し、倭国在来の自然神崇拝と融合しながら、執行されていたものと考えられる。

取り分け、王自らが「大壇」に於いて、天地を親祭する祭祀の源流は、中国王権に依って執行されていた「封禪」(霊山聖域で執行)や「郊祀」(都城の郊外で執行)、即ち、天子自らに依る、天を祀り、地を祓い、山川を祀る自然祭祀、自然崇拝行為であったものと推測される。「封禪」は、山上に盛り壇を築造して天を祀る「封拜」と、山下に壇(ぜん。壇、禪)を築いて地を祀る「禪祭」の2つの祭儀より構成された。元来は天子の巡幸に合わせ、天下の安泰を願ったものである。秦の始皇帝が紀元前219年に泰山で、前漢の武帝が同110年に同所で執行した封禪の事例が知られる。

この武烈王に依る「設壇修神術」の事例では、名目上、降水を目的として祈願した祭儀では無かったものの、結果として出現した「光」は「大瓮」の形状をしていたのである。即ち、それは天空に於ける巨大な貯水池＝降水、を示唆したものであった。恰(あたか)も旧暦の5月11(9)日～6月22日とした明確な時間表記(水田が最も水を必要とする時期)には、大量の水資源を必

要とする水稲耕作を司る王権の姿が潜在させられていた可能性がある。武烈王が執行した星浮山に於ける神術とは、「封禪」であったものと推測されるのである。

尚、「恠星」の出現は「禳」の対象であったことが知られる。結果として、この場合には国に不幸を齎す「大恠」ではなく、仕官を希望していた男の子息が星浮山より下山する途中、虎に襲われて死亡するという事故の凶兆として描かれている。男は自身の息子と謀り、星浮山で松明を高く掲げさせて「恠星」を偽装していたのである。「虎傷而死」とするのは、現在では既に韓半島では見られなくなっている、アムールトラ(虎)、ヒョウ(豹)等の大型ネコ科動物に依る被害であろう。アムールトラ(虎)の場合、雄の個体では体長約330センチメートル、体重約300キログラムに及ぶものもある。こうした野生動物に依る人間襲撃も災異の1つとして位置付けられていたことが想定されるのである]

(3) 卷一、太宗春秋公:「第二十九、太祖大王。名春秋。姓金氏。龍樹一作龍春。角干追封文興大王之子也。(中略)太宗初即位。有獻猪一頭二身八足者。議者曰。是必并吞(併吞する)六合(りくごう。天地四方)瑞(みず。瑞兆)也」[新羅国の太宗武烈王が即位して間も無い頃、「一頭二身八足」の猪を献上する者がいた。「猪」と「豕」とは、語義が相通することより、この動物がイノシシなのか、ブタなのかは不明である。この事例では、生き物としては1頭ではあるが、元々2頭であった動物が結合、合体したと考えたことに対して瑞兆観を見出していたことが推定される。版図拡大の吉兆であると見做したからであろう。韓半島に於いて、「見做しの文化」が存在していたことの証左となり得る事例である。こうした「見立て」行為は、後に倭国・日本へも伝播し、日本文化の基層部分を形成するに至っていたことも想定される。

「三國史記」―「新羅本紀 第五」太宗武烈王春秋2年(655)10月条では、「牛首州獻白鹿。屈弗郡進白猪。一首二身八足。王女智照。下嫁大角滄庾信。立鼓樓月城内」と記す。当該「三國遺事」記事作成の元とされた記事であろう。これは、白色の鹿と一首二身八足の白猪の献上記事であり、白鹿や白猪は実際に色素異常であった個体か、又

は、遠目に少し白色がかった鹿や猪を白鹿、白猪であると見立てた、見做し行為であろう。アルビノ(albino)症状は、人間をも含めた動物に於いて出現する遺伝子疾患(白化現象)である。先天的にメラニンが欠乏することに依り出現するとされる。アルビノの人間に対しては、古来、迫害や差別等の行為もあったとされるが、それ以外の動物の出現に関しては、少なく共、東アジア文化圏に在っては、吉祥として見做されたのである。当該記事も、武烈王の即位と関連付けられた吉祥記事であるものと推定される。又、大角滄庾信への王女智照下嫁の吉兆としても位置付けられた記事であろう。常とは異なる状態の動物の出現も、取り分け、その色彩が白色であった場合には、祥瑞として認識されていたことが窺われる。

この様に、結合双生児の出現事例は、「三國史記」中に於いても複数の記載が為されていたが、人間をも含めた動物に依る異常多産事例をも合わせて、それらが忌むべきもの、差別の対象であるとされていた事例は、寧ろ稀である。例えば、「新羅本紀 第九」惠恭王乾運2年(766)2月条には、「王親祀神宮。良里公家牝(めす)牛生犢(こうし。子牛)、五脚、一脚向上。康州地陷成池。縱廣五十餘尺。水色青黑。冬十月。天有聲如鼓」とあり、5脚の脚を持った奇形子牛の誕生記事が記される。「向上」とする表現法には、惠恭王乾運即位を慶賀する意が含まれる可能性もあるが、但し、後続の記事より推察するならば、「犢、五脚、一脚向上」事象は凶兆であろう。

又、「百濟本紀 第一」始祖溫祚王25年(7)2月条では、「王宮井水暴溢(いつ。あふれる)。漢城人家馬生牛。一首二身。日者曰。井水暴溢者、大王勃興之兆也。牛一首二身者、大王并鄰國之應也。王聞之喜。遂有并吞辰、馬之心」としている。この「漢城人家馬生牛。一首二身」記事も、「大王并鄰國之應也。王聞之喜」とあって、結合双生児の出現を吉兆として描写している。古代の朝鮮半島南部地域に存在した三韓(馬韓、辰韓、弁韓・弁辰)の1つが馬韓である。この馬韓諸国の中の1つであった伯濟(はくさい)国を中心として、4世紀前半に後の百濟国が成立したとされる。始祖溫祚王は、自ら(の国)を一首二身の牛に準え、「并吞辰、馬之心」、即ち、半島南東部に在ったとされる辰韓や弁辰(弁韓)諸国、半島の南西部に

在ったとされる馬韓諸国の上首としての位置付けを強調していたとするものであろう。当該記事では、馬や牛と言った動物に関わる故事を基にしながら、百濟国成立の正当性を主張する編纂意図があったものと推測される。

尚、「六合」とする空間認識は、必ずしも地上世界全てを指し示すだけではなく、この空間、全宇宙をも表現する概念として存在していた。時期は下って「續日本紀 卷二十一 淳仁天皇」天平宝字2年(758)8月庚子朔条に於いても、「伏惟(おもう)。皇帝陛下乃聖繼聖。括(くくる)。纏める)六合而承基。乃神襲神。環(めぐる)四溟(めい。大海原)而光(てらす)宅。期政道於刑措。駢懷生於仁宜。追遠之孝尤重。錫類之德弥(稱)厚」の如く使用されており、「四溟」(海上世界)に対応した陸上側の概念として、奈良時代に至っても猶、日本に於いても行なわれていたらしい。

以上は、奇形動物の出現が、(場合に依っては)吉兆であると認識(解釈)されていたことを示す事例であるものの、当該事例にあっても、「議者曰」とある如く、吉凶の最終判断は巫(ふ、かんなぎ。神に仕える女性)等に委ねられていたことが考えられ、当時としても、一般人が可視的に直ぐ、それらの出現が災異の予兆であるのか、否かを判断出来ることでは無かったものと考えられる]

(4) 卷二、聖徳王:「第三十三、聖徳王。神龍二年丙午歳(706)。禾不登。人民飢甚。丁未(707)正月初一日至七月三十日。救民給租。一口一日三升爲式。終事而計三十萬五百碩(石)也」〔新羅国の第33代国王であった聖徳王(在位期間は702~737年)の項に記された飢饉に関する記事である。706年は、稲が不作であり、恐らくはこの年の秋口より飢饉が発生していたものと考えられる。不作の原因に関する記載は無い。そこで、王権は翌707年正月~7月にかけて、租として人民から徴収していた穀物の中より、1人1日当たり3升相当を支給したのである。その総額は30万500石に及んだとしているが、単純計算でこれは、延べ10,016,666人分の支給量に当たる。1日当たりでは47、698人分となることに依り、これが穀物を支給されていた飢民の実数であろう。「救民給租。一口一日三升爲式」とした数値自体は、「三國史記」―「新

羅本紀 第八」聖徳王興光6年(707)条に「春正月。民多饑死。給粟人一日三升、至七月」とあるのを根拠とした計算であろう。支給されていたのは、米では無く、粟であった。

「新羅本紀 第八」聖徳王4年(705)条では、「夏五月。旱。秋八月。賜老人酒食。九月。下教禁殺生。遣使如唐獻方物。冬十月。國東州郡饑。人多流亡。發(はなつ。派遣する)使賑恤」、翌5年条で、「春正月。(中略)国内饑。發(ひらく)倉廩(そうりん。穀物倉庫)賑之。三月。衆星西流。夏四月。遣使入唐貢方物。秋八月。(中略)遣使入唐貢方物。穀不登。冬十月。遣使入唐貢方物。十二月。大赦」と記しており、この度の飢饉の原因は旱害に依る不作であったことが判明するのである。旱害発生後に於ける「賜老人酒食」措置は、一見すると飢饉対応策の様にも見受けられるものの、実際には旱害の発生とは無関係である可能性があり、酒食の下賜対象を老人に限定したのは、敬老思想、農繁期の終了と関係があるものかもしれない。「下教禁殺生」の対象は、人間をも包括した小動物、魚、鳥であろうか。これは、飢饉発生後に起こることもある「人相食」行為を阻止したいとする王権の予防的措置であった可能性が考慮される。

聖徳王4年も10月に入ると新羅国の東部地域に於ける飢饉状態は深刻化し、多くの飢饉難民が発生し、これに対して王権は賑恤をせざるを得なくなったのである。「國東州郡」とは、金城をも含む日本海沿岸部地域が主たる被災地であったものと考えられる。そうした状況は翌5年に入っても改善されることは無かったらしく、「人多流亡」状態は続いたものと推測される。2年続きの旱害が発生していたのであろう。こうした環境難民の最初の流亡先は都である金城であったものと推測されるが、都にも彼らに与えるだけの余剰穀物は無かったと考えられる。ここでは、「國東州郡饑。人多流亡」記事は「衆星西流」記事と対応しているものと考えられ、人々の流亡先が国の西部地域、黄海沿岸部であったことを類推させるのである。場合に依っては、更に黄海を横断した、中国山東半島~江蘇、浙江方面であった可能性すら、想定されるのである。天文上の異変が地上に於ける災害を示唆したものとして認識されていた事例である。「衆星西流」とは、この年8月の「穀不登」の

凶兆として位置付けられた記事であろうが、そうした厳しい状況下に在っても、この年、3回に渡って実施された「遣使入唐貢方物」行為は、「衆星西流」とした、西の方角への傾斜を示すものであろうか。12月に実施された大赦は飢饉発生を受けて実施されたものであろうが、そのことは又、更なる治安悪化を招いていた可能性も推察されるのである。

新羅国にとっての西の方角観とは、「唐」の存在(支援)を意識したものであった可能性がある。聖徳王5年には、4月、8月、10月条に「遣使入唐貢方物」記事が出現し、前年にも、「遣使入唐朝貢」(3月条)、「遣使如唐獻方物」(9月条)、同6年12月条に「遣使入唐貢方物」と記される。新羅国では、聖徳王興光4年5月に始まる旱害に依って大規模な飢饉が発生し、多くの餓死者を出していたものと推測される。そうした状況は、同6年頃迄続いていたものと考えられ(同6年正月条には「民多饑死」と記される)、新羅国内だけでは事態の收拾がつかなくなっていた可能性がある。最早、飢餓状態は新羅国一国では収まり切らなくなっていたものと推測されるのである。

そうしたさ中に実施していた、異常な程の度重なる唐への遣使には、穀物自体やその種子の支援要請の目的があったものと推測される。聖徳王興光6年条では、「春正月。民多饑死。給粟人一日三升、至七月。二月。大赦。賜百姓五穀種子有差。冬十二月。遣使入唐貢方物」と記され、正月条の「給粟人一日三升」にある粟、同2月条に記される「賜百姓五穀種子有差」の五穀種子は、唐よりの支援に依るものであった可能性が濃厚であろう。三国史記が正史である以上、敢えてその事実を記録しなかった可能性も考慮されるのである。

若し、この推論が正しいのであるならば、8世紀初頭には、自然災害の発生に際して、既に国境を越えた形での広域連携支援が実施されていたことになるであろう。飢饉発生に伴う粟支給の具体的数量、3升/1日、が記された初見記事でもある。「春正月。(中略)至七月」とあるのは、前年条に記された「國內饑」、「穀不登」の状況がかなり深刻であったことを示すものであり、飢饉状態は、少なく共、聖徳王興光4年10月以降、継続していた可能性がある。6年2月の大赦実施は飢饉鎮圧、この年の五穀豊穡を祈る目的であろうか。

王権が当年分穀物の種子を給与したとする初見記事であり、種子に当てるべき穀物をも、食用に回さざるを得ない程に飢饉が深刻化していた可能性があるであろう]

(5) 卷二、孝恭王:「第五十二、孝恭王。光化(唐昭宗の年号。但し、光化は4年で改元)十五年壬申。實(実際には)朱(後の誤)梁(唐後、五代十国時代初期の王朝。朱全忠に依り開かれた)乾化二年(912)也奉聖寺外門。東西二十一間。鵲(かささぎ)巢。又神徳王(新羅国第53代王)即位四年乙亥(915)。古本云。天祐(唐昭宗の年号。唐は哀帝が朱全忠へ禅譲を行ない、907年に滅亡)十二年(915)。當作貞明〔後梁朱友貞(末帝)の年号〕元年(915)。靈廟寺内行廊(ぎょうろう。行廊房。大門に接続して造られた使用人の部屋)。鵲巢三十四、鳥巢四十。又三月。再降霜。六月。斬浦水與海水波相鬪三日」〔新羅国の第52代国王であった孝恭王と、次の神徳王治世に認められた災異記事である。ここでは時間認識、地域認識の錯誤があったものと考えられる。それは、一然(普覚国師)自身に依るものの他、彼が参照をしていた史料類に元々存在していたものであった可能性がある。

ここでは、鳥に関わる話題が大きく取り上げられているものの、「新羅本紀 第十二」では、孝恭王や、次の神徳王治世に於いても鳥類に関わる記事を掲載してはいない。従って、鳥に関わる当該記事の根拠は他史料に求めていたことになる。具体的に名称が記される「鵲」は「新羅本紀」に於いて多く出現する鳥類である。鵲は尾羽が長く、羽を広げると蝶のように見える美しい鳥であり、全長は約45センチメートル程の中型の鳥であって、スズメ目カラス科に属する。カチガラス、朝鮮鳥、高麗鳥等とも称される。雑食性であって、昆虫やカエル、魚介類、果実類、穀物類、豆類をも餌とする。ユーラシア大陸、カムチャツカ半島、及び、北アメリカ大陸西部等の中緯度帯に広く分布をしているが、日本国内でも、佐賀県を中心とした筑紫平野等、九州北西部に於いて見ることが出来る。そこでの営巣期間は、大よそ10月下旬～3月の間である。

「新古今和歌集 卷第十八 雑歌 下」₍₁₉₎に収められる菅原道真の和歌に「彦星のゆきあひ(行合。出会い)を待つかささぎ(鵲)の門(と)渡る橋

を我にか（貸）さなん」（1700番）、中納言家持（大伴家持）の和歌にも「かささぎ（鵲）のわた（渡）せる橋にを（お）く（置く）霜の白きを見れば夜ぞふけにける」（620番）とある如く、陰暦の7月7日の夜に、牽牛と織女とが逢瀬を持つ際、鵲はその広げた羽を船橋の様にして天の川に架橋し、男女の仲の橋渡しを行なったとされる。七夕説話に於いては、鵲がこの二星の仲立ちをする鳥として描写されるのである。大伴家持の和歌に在る「霜の白き」とは、天の川が白く見えるのを降霜に見立てたものであろう。「三国遺事」に「鵲巢三十四、鳥巢四十。又三月。再降霜」とあるのを、七夕説話の反映であるとするのは、少し穿（う）が）ち過ぎであらうか。

従って、鵲とは幸福を齎す鳥であり、その出現とは吉兆である。それが集団で営巣するという状態とは、新羅国にとっては、国家にとっての大きな繁栄、慶事が出来る前兆現象として捉えられていたに違いない。そして、これらの現象が認められた場所が、奉聖寺や靈廟寺といった仏教寺院の主体部分ではなく、外門、行廊と言う付属施設であったとすることは、僧侶であった一然に依って為された原史料よりの悪意の無い改竄（かいざん）、又、作為であった可能性を窺わせるものであろう。更に、鳥自体も新羅国にとっては特別な意味を持つ動物であったのである。

「新羅本紀 第一」脱解尼師今元年（57）条に依れば、「脱解本多婆那國所生也。其國在倭國東北一千里。初其國王娶女國王女爲妻。有娠。七年乃生大卵。王曰。人而生卵。不祥也。宜棄之。其女不忍。以帛裹卵并寶物。置於櫝（とく。小箱）中。浮於海。任其所往。初至金官國海邊。金官人怪之不取。又至辰韓阿珍浦口。是始祖赫居世在位三十九年也。時海邊老母。以繩引繫海岸。開櫝見之。有一小兒在焉。其母取養之。及壯身長九尺。風神秀朗。知識過人。或曰。此兒不知姓氏。初櫝來時。有一鵲飛鳴而隨之。宜省鵲字、以昔爲氏。又解韞（うん。だいだい色）櫝而出。宜名脱解。脱解始以漁釣爲業」とし、「三国遺事 卷一」に於いても、「南解王時。古本云壬寅年至者謬矣。近則後於弩禮即位之初。無爭讓之事。前則在於赫居之世。故知壬寅非也。駕洛國海中有船來泊。其國首露王與臣民鼓譟而迎。將欲留之。而舡乃飛走。至於雞林東下西知村阿珍浦。今有上西知、下西知村名。時浦邊

有一舡。名阿珍義先。乃赫居王之海尺之母。望之謂曰。此海中元無石崑（くら）。何因鵲集而鳴。桴舡尋之。鵲集一舡（こう。船）上。舡中有一櫃子。長二十尺。廣十三尺。曳其船置於一樹林下。而未知凶乎吉乎。向天而誓爾。俄而乃開見。有端正男子。并七寶奴婢滿載其中。供給七日。廼言曰。我本龍城國人。亦云正明國。或云琬夏國。琬夏或作花厦國。龍城在倭東北一千里。我國嘗有二十八龍王。從人胎而生。自五歲六歲繼登王位。教萬民修正性命。而有八品姓骨。然無棟擇。皆登大位。時我父王含達婆娑積女國王女爲妃。久無子胤。禱祀求息。七年後產一大卵。於是大王會問羣臣。人而生卵。古今未有。殆非吉祥。乃造櫝置我。并七寶奴婢載於舡中。浮海而祝曰。任到有緣之地。立國成家。便有赤龍。護舡而至此矣」（第四、脱解王）と記述している。更に、「新羅本紀 第一」脱解尼師今3年（59）条には、「夏五月。與倭國結好交聘。六月。有星孛于天船」と記されており、天船（ペルセウス座）領域への彗星出現記事は、前月条にある「與倭國結好交聘」を凶なるものと位置付けたものとして出現をする。正に脱解尼師今王権の存在とは、「天」、「鵲」、「海」、「卵」、「龍」、⁽²⁰⁾「水」、「漁業」との結び付きが非常に強固な性質を帯びるのである。

「天船」自体も、船舶に乗って当地へやって来たという脱解尼師今（の治世）を表現していた可能性が有ろう。「其國在倭國東北一千里」や「脱解始以漁釣爲業」とした表現法よりは、漁業者集団としての「海人（あま）」との繋がりも想起される。倭国に於ける海人は、北部九州を根拠地として、後にはヤマト王権に取り込まれて編成され、日本の沿岸沿いに東進させられて行くのである。「日本書紀 卷十 應神天皇」では、応神天皇3年（272）11月条に於いて、処々の海人（アマ）がヤマト王権の命に服さず、阿曇連の祖である大濱宿禰を派遣して、鎮定した記事を載せる。後に、彼は佐摩阿摩（サマアマ）と呼ばれる「海人之宰（ミコトモチ）」として、彼らを管轄する立場に至ったらしいが、それを受けて、同5年8月条には、諸国に山守部と共に、海人部の部民が定められている。彼らは現地では海部直に統率され、更に中央豪族である伴造阿曇連の支配下に入り、ヤマト王権に依る初期海軍制度に組み込まれたのである。

更に、「初櫝來時。有一鵲飛鳴而隨之。宜省鵲字、

以昔爲氏」や「何因鵲集而鳴。拏舡尋之。鵲集一舡上」とした鳥類「鵲(かささぎ)」との繋がりも又、脱解尼師今が鵲の様に東アジアへ広域的な分布を見せる鳥類に因み、海上支配、海人支配と深く関わっていたことを類推させる記事でもある。鳥と海との関係性とは、羅針盤の無い時代に在って、海人が陸地の見えない海上に於いては、鳥の進行方向を1つの根拠にして航海をしていた可能性を示すものであろう。こうした海人(集団)を接点とした韓半島と倭国との紐帯(ちゅうたい)であるが、その後、両者の間では「水(災害)」を巡る認識の差異が顕然化して行ったのであろう。倭国では、中国大陆、韓半島経由で齎された羽衣伝承、浦島伝承(死者の国としての海底世界、龍宮城の存在)の如く、海人集団は「水災害」の伝承者としての性格をも強力に付加するに至るのである。韓半島の東海岸沿岸部でもそうした傾向はあった。そのことは、「三国遺事」当該条の後続記事に現われていたのである。

神徳王4年6月にあったとする「斬浦水與海水波相鬪三日」現象は、「新羅本紀 第十二」に於いても「斬浦水與東海水相擊。浪高二十丈許。三日而止」として記録されていた。これは日本海の海底を震源とした地震に依る津波であった可能性がある。「三日而止」現象とは、津波の押し波、引き波の繰り返しであった可能性が高いものと推測される。1丈は10尺であるから、「浪高二十丈許」とは約60メートルに当たる。これは津波自体の波高ではなく、津波の遡上高を示した数値ではあろうが、2011年の東日本大震災時に於ける津波遡上高最大約37.9メートル(岩手県宮古市)を大幅に上回る威力である。日本海は内海である為に、一旦、大きな津波が発生した場合には、津波の押し波、引き波の繰り返しが顕著に出現し、その影響が長引いていた可能性を排除することが出来ない。それが「三日而止」表現法に表わされていたものと推測されるのである。但し、『理科年表 平成30年 第91冊』⁽²¹⁾所収の、「日本付近のおもな被害地震年代表」には、当該地震に関する記載は無い。

尚、「新羅本紀 第十二」では、神徳王2年4月条で「隕霜。地震」、同5年10月条に「地震。聲如雷」記事が記される。これらの地震は、神徳王4年6月に発生していた地震(本震)の前震

(予震)、余震関係にあったものと考えられる。同4年6月条に於いて、地震の揺れそのものに関する記載が無いのは、当該地震の震央が韓半島よりはかなり離れた地点(海底)であったからであり、新羅国領域での地上の揺れが感知されてはいなかったからであろう。同5年10月条で、地震発生の際の音声が雷の様であったとする音声認識は、その両者が低音の大音声であるという共通項と共に、それらが天(神)と地(祇)、双方より発せられた警鐘として、当該自然現象が見做されていた結果であろう]

(6) 卷二、駕洛國記文廟朝。大康年間。金官知州事文人所撰也。今略而載之:「開闢(かいびやく。天地創造の時)之後。此地未有邦國之號。亦無君臣之稱。越有我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干、留水干、留天干、神天干、五天干、神鬼干等九干者。是酋長。領總百姓、凡一百戸七万五千人。多以自都山野。鑿井而飲。耕田而食。(中略)忽一夕夢見七八介(7~8名) 鬼神、執縲紲(るいせつ。罪人を捕縛する為の縄)、握刀劍而至」[「駕洛國記(からこっき)」「駕洛記」とは、割書きの部分に「文廟(高麗国の第11代国王の文宗)朝。大康(「太康」か。遼・契丹国の道宗の年号)年間。金官知州事(金海の長官。金良鑑)文人所撰也。今略而載之」と記されている様に、韓半島南部地域に於ける金海加羅国(金官伽耶、大伽耶)以降の事績に関して、高麗王朝前半期に当たる1076年に、知金州事であった金良鑑に依り成立した地誌的歴史書である。この場所は、現在の慶尚南道金海郡、釜山広域市付近を中心とした地域に当たり、3世紀頃には他の韓半島地域や、倭国、そして、楽浪郡・帶方郡等とを結ぶ海上交通路の要衝として存在していた。尚、当該「三国遺事 卷二」所収に拘わる「駕洛國記」は、全文では無く、要約、抄録であるとしている。

本稿で引用した箇所には、「神鬼干」、「鬼神」とする記載が数カ所に於いて見られる。冒頭部分に於いて、「神鬼干」とは地域勢力としての「九干」の1つであるとしている。これは、単なる固有名詞であったのか、それとも中国大陆由来の鬼神(きしん、きじん、おにがみ)信仰に基づいたものであったのであろうか。

中国に於ける鬼神とは、祖先や死んだ者の靈魂を意味したのである。それ故、礼として鬼神は祭

祀の対象であると共に、「礼記」に見られる如く、それは天地であり、山川であり、陰陽でもあった。一方、天地創造、人生開発、妖怪変化等、その超然的性格、靈妙性、多様性が鬼神の特徴でもある。人間の魂（精神を司る陽の存在）はその死後に於いて天上界へ至り神となり、魄（はく。肉体を司る陰の存在）の方は地上に在って鬼になるとされた。鬼神は生命に対して災難や幸福をもたらす神靈的な存在であって、その発現に依り、善神にもなり、悪鬼とも姿を変えたことから、祭祀と共に、祓（はらい、はらえ）の対象となった。遅く共、弥生時代晩期（2～3世紀頃）には、その存在、思想や、驅逐法（桃核を使用した形での祭祀等）と共に、鬼神は倭国へ伝播したものと推測されるのである。

「神鬼干」の呼称が、上記の様な中国に於ける鬼神の存在や運用法に立脚していた可能性は考慮されるであろう。本項では、神鬼は脱解尼師今の臣として登場するが、それを逆にした「七八介（7～8人の）鬼神」の方は、話題上では金海府の量田使（田の測量を行なう役人）に対し、その業務上の瑕疵を咎め立てて、刑罰を与える者として出現するのであった。その意味に於いて、この「鬼神」は人に災異、災厄を齎す存在として見る事が出来得るであろう]

（7）卷二、駕洛國記文廟朝。大康年間。金官知州事文人所撰也。今略而載之：「又有賊徒。謂廟中多有金玉。將來盜焉。初之來也。有躬（きゅう。自ら）擯（かんする。身に付ける）甲冑、張弓挾（はさむ。弓に矢をかける）矢、猛士一人。從廟中出。四面雨射。中殺七八人。賊徒奔走。數日再來。有大蟒（ぼう、うわばみ。大蛇）長三十餘尺。眼光如電。自廟旁出。咬殺八九人。粗得完免者（何とかして大蛇より逃げた者）。皆僵仆（きょうふ。倒れ、死ぬ）而散。故知陵園表裏。必有神物護之」[「駕洛國記（駕洛記）」に記された、宗廟に関わる逸話である。

或る時、盜賊が副葬品として多くの財宝金玉が納められている廟の話しを聞き付け、それらを盗もうとしたのであった。ところが、祠堂の中より甲冑を身に付け、弓に矢を番（つが）え、武装した1人の猛士が出て来て、四方に向けて雨の如く矢を浴びせたのである。その矢は7～8人に中（あた）り、殺してしまった。数日後、再び盜賊は廟

に現われた。そうした処、長さ30尺（約9メートル）余りもある大蛇が現われ、その眼光は雷光の様であった。廟の傍らより出て来たその大蛇は、8～9人を咬み殺した。命辛々逃げた者も、或は倒れ伏し、散りじりになった。それ故、陵園の周辺には必ず神物があり、それを護っているとする話である。物語の最初に登場する猛士は大蟒であり、何れも廟を守護する神物、化身なのである。

神物（かみもの、しんもつ、しんぶつ、じんもつ）とは靈妙不可思議なものであり、人ではない。ここでは、宗廟のある場所を聖域とし、その境界領域（アジール）を犯した者には神罰が下るとした主張である。日本に於いて、大江匡房撰に依る説話集である「本朝神仙伝」中に記された空想上の山、金峯（峰）山（きんぷせん）と、そこ（女人結界・女人禁制としての聖域）によじ登ろうとした「トラン尼（都藍尼）」の存在とを想起させる話である。^{（22）} 神仏的な要素の強い説話集ではあるが、両者の間には共通項が多々見られるのである。

（大）蛇、若しくは、龍の存在とは、古来、多量の「水」の存在の置き換え表現法でもあった。少なく共、倭国ではそうである。その眼光が雷光の如くであったとしているのも、雷光、雷電と大雨との間に密接な関係があることを想起させるものであろう。廟中より出現した1人の猛士が放ったとされる「四面雨射」とは、豪雨（災害）を示唆したものであると推測される。具体的に記された、「一人」、「七八人」、「八九人」、又、「長三十餘尺」とした数字、数量詞は、当該自然災害に依って被害を被っていたかつての人的、物的損害であり、土石流等の土砂災害の規模であった可能性も考慮される。当所がそうした、「水災害」の危険地帯であることを説話風に記述したのが、この物語であるものと推察されるのである。禁忌（聖域を犯す事）と自然災害とを直接的に結び付けて、後世（子孫）に対する警鐘としていたことも考えられる。

文字認知、高識字率を前提条件とはしていなかった社会に在っては、こうした物語風なストーリーの話者・語り部の存在が、有効的な情報伝達の手法であった。更には、聖域を犯すことに依り発生する災異（自然災害）、と言う位置付けでもあろう]

（8）卷三、阿道基羅。一作我道。又阿頭：「新羅本紀第四云。第十九訥祇王（新羅国第19代国王訥祇麻立干。～458年）時。沙門墨胡子自高

麗（高句麗国）至一善郡。郡人毛禮或作毛祿。於家中作堀室安置。時梁遣使賜衣著香物。高得相詠史詩云。梁遣使僧曰元表。宜送溟檀及經像。君臣不知其香名與其所用。遣人齎（もたらす。持参する）香。遍問國中。墨胡子見之曰。此之謂香也。焚之則香氣芬馥（ふんぷく。香りが良い様子）。所以達誠（誠心。真心）於神聖。神聖未有過於三寶（仏法僧）。若燒此發願。則必有靈應（れいおう。靈驗）。訥祇在晉宋之世而云梁遣使。恐誤。時王女**病革（やまいあらたまる。病状が重篤となる）**。使召墨胡子。焚香表誓〔神仏にかけて誓うこと。願（がん）〕。王女之病尋（間もなく）愈（いえる）。王（訥祇麻立干）喜厚加賚（らい。たまもの）**貺（きょう。下され物）**。俄而不知所歸」

〔新羅国の第19代国王であった訥祇麻立干の治世に於ける、仏教との出会いの記事である。沙門墨胡子（ぼくこし）はこの時、高句麗国より新羅国の一善郡（慶尚北道）にやって来て、初めて新羅国へ仏教を伝えたと言われる。その住民であった毛禮（毛祿）が、自宅に掘った室に「安置」したものが墨胡子であったのか、或は、經像であったのかは不明である。

文中に記された「香物」、「三寶」、「發願」、「靈應」等と言った語からは、その背景に存在する仏教思想の影響を強く感じるものである。又、僧侶と医学との繋がり、倭国に於ける僧医、医僧の存在にも見られる様に、文字認知、識字率の低い社会に在っては、必然的な社会現象であったとも言う事が出来得る。韓半島に在っても、医学書は中国由来のものが主流であったものと考えられるが、その解読能力を有する者は限定されていたからである。確かに、仏教僧侶が行なう治療行為には、仏教上の慈悲思想に起因したものもあるが、やはり、宗教としての仏教を布教する目的が大きくあったことは否めない。従って、仏教の拡散に関しては、布教者としての僧侶、偶像としての「經像」（涅槃像ではない立像タイプの仏像）、仏典、そして、「香」が必須の要素としてあったものであろう。

ここでは、そうした治療行為、祈禱行為に際して、「香」が大きな位置を占めていたことが特徴的であった。高得相に依る歴史題材誌である「詠史詩」には、中国南朝の梁（502～557年）が元表という使僧を派遣して、「溟檀」という檀香（芳香を放つ香木）と「經像」とを新羅国へ送ったと

あるものの、訥祇麻立干の没年であった458年よりは、年代観が丁度100年程ずれている。世界最古の企業体であるとされる、大阪府大阪市所在の寺社建築企業「金剛組（こんごうぐみ）」は、元々は、百済国より来訪した渡来人である金剛重光に依って創業されたとする。日本が未だ古墳時代の後期にあった578年、金剛組初代となる金剛重光を始めとする3人の工匠が倭国（ヤマト王権）、聖徳太子〔厩戸王（うまやどのおう）〕よりの招請を受けて来日し、四天王寺や法隆寺等の建立事業に関与したとされている。6世紀の中葉に北方系（経由）の仏教が中国、韓半島経由で日本へ齎されて以降、日本に於いては仏教寺院の建立が相次ぎ、それに大きな役割を果たしたのが彼ら、韓半島よりやって来た渡来人の建築技術者集団であった。そうした年代観より推測するならば、中国南朝の梁より新羅国へ仏教や、付随物が齎されていたことには整合性があろう。

文中では新羅国の誰もが、梁より齎された香物の名や、その使用法を知らなかったとあり、墨胡子だけがそれを知っていたとすることより、韓半島では生産されない香木も仏教と共に半島へ流入していたことになる。香は加熱することに依り「香氣」を発生し、人の真心は神聖に達することが出来、香を焚きながら發願するならば、必ず靈驗（利益、りやく）が得られるとしている。「三国遺事 卷一」—「桃花王。鼻荊郎（コカシラン）」に記されていた、「以其女入於房。留御七日。常有五色雲覆屋。香氣滿室」の「香氣」とは、こうした香木由来の芳香であった可能性もある。香を焚くと、ホルムアルデヒド、一酸化炭素、酸化窒素等の汚染物質を放出するとした見解もあるが、それらが目や鼻、喉、皮膚を刺激したり、呼吸器への影響、頭痛等、健康への悪影響が指摘されることもある。

つまり、そうした刺激が、仏教に於いて認識判断の対象とされる6領域〔色境、声境、香境、味境、触境、法境。心の清浄を汚す観点からは六塵（ろくじん）と称される〕の1つ香境として、「戒」に繋がるとした思想があることから、香を焚くことに依り人体を刺激し、そうした健康上の悪影響を敢えて現出させながら、持戒させようとしたものかもしれない。現在の視角に於いては、疾患の治療に対して効果の見込めない「香」であるが、その発する煙や臭いが刺激性であるが故に、異次

元世界（仏教領域）へと人を誘う重要な舞台装置であったものが「香」であった。その神秘性、呪術性に着目をし、仏教祭祀に於いても盛んに用いられる様になったものであろう。

訥祇麻立干の王女（の病氣）が重篤となった際、墨胡子は香を焚きながら祈禱を行なった。そうした処、彼女の病氣は間も無く快癒したのである。従って、香は焚くことに依って効力、靈妙な力を最大限に発することが出来る様になり、重篤な病氣でさえも直すことの出来る力を生み出す装置として位置付けられている。日本に在っても、「日本靈異記 中巻 第二十八縁」に見える聖武天皇時代に於ける逸話として「極めて窮（まづ）しき女（をみな）釈迦丈六仏に福（さきはひ）の分を願ひて奇しき表（しるし）を示（あらは）し現（うつ）つに大なる福を得る 縁（ことのもと） 第二十八」が記される。（23）

これに依れば、平城京に在る大寺であった大安寺の西里に住んでいる1人のとても貧しい女性は、大安寺の丈六仏が衆生の願いを直ぐに叶えてくれるとして、長い期間に渡り、幸福を願って、花と香（こり）と油〔燈（みあかし）。燈明〕とを買って、何回も参拝に行く様子が描写されている。奈良時代当時の日本では、香木は輸入品、希少品であり、庶民の手に入れることの出来る品物では無かったことが推測されることから、この場合の香がここで取り上げている香木由来のものであったのか、否かは判然とはしない。それが練香（ねりこう）であった可能性もあろう。練香は香木そのものではなく、沈香（じんこう）等の香木を砕いたもの、ハーブやスパイス等を蜂蜜や梅肉等を使い丸薬状に練り固めたものである。聖武天皇が蘭奢待（らんじゃたい）。「蘭奢待」夫々の語中に「東大寺」の文字を含むことより「東大寺」と称する。黄熟香と名付けた香木は正倉院の中倉に伝えられて来た名香であり、木所（きどころ。香木の種類）は伽羅（きゃら）であった。

韓半島同様、香は日本へも仏教文化流入に伴い、6世紀前半期には既に齎されていたものと推測される。上記の様に、香は一般民生用品ではなかったことより、当初は寺院内で仏像周辺領域を聖域化、清浄化する供香（くこう、ぐこう）として、又、布教時に舞台装置として利用される様になったのであろう。しかし、8世紀以降になると、上

層階級の人々は衣服や、部屋全体に渡って香を焚きしめる様になり、空薫物（そらだきもの）の形で以って、仏教を離れて実用品としての香の隆盛を見たのである]

（9）巻三、皇龍寺丈六（一丈六尺）：「新羅第二十四眞興王即位十四年癸酉（553年）二月。將築紫宮（王の宮殿）於龍宮南。有黃龍現其地。乃改置爲佛寺。號黃龍寺。至己丑年（569年）、周圍墻（しょう、かき。垣根）宇、至十七年、方畢（竣工した）」[皇龍寺創建に関わる経緯を記した部分である。皇龍寺が創立されたのは、「三国史記」―「新羅本紀 第四」眞興王14年（553）2月条に「王命所司。築新宮於月城東。黃龍見其地。王疑之。改爲佛寺。賜號曰皇龍。秋七月。取百濟東北鄙。置新州。以阿飡武力爲軍主。冬十月。娶百濟王女爲小妃」と記されるのを、その根拠とする。これは、「黃龍」出現と仏寺（皇龍寺）創建とを関連性あるものとして位置付けた記事である。龍を仏教と結び付けた初見記事でもある。

中国神話に於ける四神（古代中国天文学に於ける、東方青龍、南方朱雀、西方白虎、北方玄武）の中心に位置した「黃龍」の出現であるが、当該事例に在っては、それが必ずしも祥瑞としては扱われてはいない。慶州に於いて、「築新宮於月城東」ことが四神相応の原理を乱すものとして、「黃龍」が出現し、人々に対して警告を行なったものと認識された可能性がある。従って、その場所は当初予定されていた宮所ではなく、仏教寺院とされたのであろう。その結果として、「取百濟東北鄙。置新州」、「娶百濟王女爲小妃」といった吉事が出来たとする、「新羅本紀」編纂の方向性であったのかもしれない。

皇龍寺の場所は、現在の大韓民国慶尚北道慶州市九黄洞である。五行説では、五龍の黃龍は五行の土に配されており、五方では中に当たる。東の方角は、五行の木であり、成長や発展を示すことより、為政者の住居である宮殿造営には否定的な見解を示す目的があったものかもしれない。皇龍寺は国家的規模を持った寺院であり、善徳女王5年（636）には、新羅三宝の1つであった九層木塔等も整備されたものの、高麗国となり、高宗25年（1238）にモンゴル軍の侵攻によって焼失し、現在は、礎石や仏座石等を残すのみである。

皇龍寺では創建以降、様々な災異が発生してい

た。「新羅本紀」に記録されているものは、「大星（おおぼし。おおいぬ座 α 星シリウス）隕皇龍寺」（第七、文武王法敏13年正月条）、「大風毀皇龍寺佛殿」（第七、文武王法敏14年7月条）、「震皇龍寺塔」（第八、聖徳王興光17年6月条、及び、第十一、景文王膺廉8年6月条）、「大星隕皇龍寺南」（第九、恵恭王乾運4年6月条）、「皇龍寺塔搖動（ようどう）北傾」（第十二、景哀王魏膺4年3月条）等であり、これらの物理的現象が事実であったのか、否かは判然とはしないものの、大抵の事例に於いては、凶兆を示唆していたものと推測される。

又、皇龍寺では百高座が設けられ、100人の許度僧に依り仁王經が講じられることもあり、王の疾病に際しては、祈祷が実施されることもあった。更には、王自らの出御もある等、王権との繋がりが密接であった。このような寺院に於ける災変とは、新羅国の行く末を占う上でも、影響力が大きかったことが窺えるのである。

「龍」や「蛇」の存在には、「水（災害）」の存在を示唆する場合がある。法華經（序品）に登場し、仏法を守護する水中の大王である八大龍王（難陀龍王、跋難陀龍王、沙伽羅龍王、和脩吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯（須）龍王、優鉢羅龍王）は、八体の護法の神、八部衆の1つ、龍神でもあり、水に関わりの深い存在でもあった。音写して那伽と書されることもある蛇神の龍王であるが、それは又、水中を支配する神でもあったのである。龍王の中でも優れた能力を持ったものは、雲を発生させ、空中を飛び回り、雨を降らせるものと信じられていた。日本に於ける龍王信仰は、四神の1つに位置付けられている想像上の動物、青龍を基本とする唐風龍王よりの影響を示唆すると言った指摘もあり、平安時代の初期に、空海が京都の神泉苑に於いて請雨經法を修した時に出現したとされる善女龍王も、唐服を纏って龍に乗る姿であったとされるのである。

そうした龍と水との関わり合いを、韓半島の場合に在っては、取り分け、繰り返された祈雨行為の中に色濃く見出すことが出来るのであった。特に「新羅本紀」に於いては、「水」の存在をイメージさせ得る記事が目立つのは、「龍」や「井」の語、それに拘わる事象の宮廷内での出現記事に見られる様に、正に、新羅国にとっては、「水の支配」

が非常に重要な課題としてあったからに他ならないからなのである]

3：内容分析

以上に於いて、本稿前編をも含め、災害事象を3類型に大別しながら記事の抽出を試みた。「三国遺事」に於ける災害記事の特質に関して、以下、検証を行なう。但し、「三国遺事」の内容には、伝承的、説話的な部分もあり、信頼性、現実性の決して高くは無いものも多く含まれていることが想定されるが、ここでは、それらが事実であったのか、否かと言う検証作業よりも、寧ろ、そうした対災害認識、対災害観が生まれて来た経緯を探ると言った文化論的視角よりの課題追究を旨とする。

先ず、❶一然（普覚国師）は宗教者（禅僧）であった為に、部分的には「三国遺事」の中には、仏教上の思想や、ものの見方が反映されていたことも想定された。そうした部分が、本書の編纂当時に於いて、韓半島での主流をなしていたものの見方であったのか、否かも含めて、今後の課題としなければならない。

又、「光化（唐昭宗の年号。但し、光化は4年で改元）十五年壬申。實（実際には）朱（後の諱）梁（唐後、五代十国時代初期の王朝。朱全忠に依り開かれた）乾化二年（912）也」、「神徳王（新羅国第53代王）即位四年乙亥（915）。古本云。天祐（唐昭宗の年号。唐は哀帝が朱全忠へ禅譲を行ない、907年に滅亡）十二年（915）。當作貞明〔後梁朱友貞（末帝）の年号〕元年（915）」（巻二、孝恭王）とある様に、諸所に於いて、中国年号を使用していたが、それは、对中国思想や、中国王権の、韓半島に於ける王権に対する優位性を認めていたからではなく、単に、参照していた原史料よりの誤りを修正し、時間表記の正確さを期す為の措置であったものと考えられる。中国王朝が採用をしていた年号を基準として、「三国遺事」を編集していたことが想定されるのである。ただ、そのことだけを以ってしても、一然が如何に多くの部分を中国史書に頼っていたのかを類推することも出来得る。それは、本文の編纂に対しても、全く影響を与えてはいなかったと評価する事も出来ない。

②「三国遺事」の記載内容には、「三国史記」の内容との類似性が諸所に於いて認められる。一然は「三国遺事」の編纂に際し、基本史料としてはそれを使用したからであろうが、「三国史記」には無い内容も多分に含まれていた。「はじめに」でも触れた様に、そうした部分は韓半島を中心とした地域で作成されていた古文書、古記録、又、半島各地に残されていた伝承等の現地での採集作業、更には、一然が海陽に在った無量寺で出家して以降、麟角寺（慶尚北道軍威郡古老面華北里華山）で永住する迄の過程での遍歴に依って得ていた、各地の情報で以って補完をしていたことが考えられる。「遺事」の語には、確かに、計画や事業に於いて、漏れ残された事項の語義もあるが、「三国遺事」には相当多くの「三国史記」記事が土台とされていることより、遺漏の意味に解釈するには無理がある。寧ろ、韓半島地域に於いて、古来、伝えられて来た逸話、の意味で理解した方が的を得ているのかもしれない。そうした逸話の裏付けを取る根拠として使用されたのが、正史として編纂されていた「三国史記」であったのであろう。

例えば、「三国遺事」巻二に所収されている「駕洛國記」は、高麗王朝前半期に当たる1076年に、知金州事であった金良鑑に依り作成されていた地誌的歴史書であるが、「三国遺事」ではその抄録を掲載するのである。態々、原典に対して抄録を作成し、「三国遺事」に掲載していた背景には、一然に依るそうした意図を汲み取ることが出来る。

③「鬼神」や「神鬼」の存在が諸所に於いて見られた。それらは、「三國遺事 巻一」―「桃花王。鼻荊郎（コカシラン）」の記述に依れば、眞智大王と桃花娘との間に生まれた男子として描かれ、彼の仲間は皆、鬼神であった。これらの鬼神は王権の制御下に在り、王権に奉仕する者として存在した。その中の有能なる吉達と言う鬼神は官僚に迄、抜擢されていたのである。従って、この場合に於ける鬼神とは、人々に畏怖され、災厄を齎す存在ではないのである。王に依って使役され、人民に貢献する存在でもあった。

同「太宗春秋公」に於いても鬼神が出現したが、それは夜になって宮殿南側の路上で泣くのである。

更に、巻二に所収された「駕洛國記」にも、「神鬼干」、「鬼神」とする記載が数カ所に於いて見ら

れる。冒頭部分に於いて、「神鬼干」とは地域勢力としての「九干」の1つであるとしていたが、これが単なる固有名詞であったのか、それとも中国大陆由来の鬼神（きしん、きじん、おにがみ）信仰に基づいたものであったのかに関しては、判然とはしなかった。ただ、「鬼神」の方は金海府の量田使に対し、その業務上の瑕疵に鑑みて、刑罰（災難）の授与者として出現するのであった。その意味に於いては、人に災異を齎す存在として見做すことが出来る。

この様に、「三國遺事」に於ける鬼神とは、必ずしも空想上の存在ではなく、話題上では確かに実在する人間の様な従順な存在であるが、或る場合には災厄を齎すこともあった。

④動植物の異常現象に関して、特筆するべき内容が見られた。「太宗春秋公」の項に依れば、659年には数々の災異記事が見られた。それらは、大きな赤馬の出現、多数の狐が百済国最後の王となった義慈王の宮廷に侵入し、その内の1匹が佐平の机上に座す（2月）、太子宫で雌鶏と小雀とが交婚（交尾）（4月）、泗沘（沘）水（扶餘江）の岸边に死んだ大魚（長さ三丈）が打ち上げられ、その魚肉を食べた者が全員死亡（5月）、宮中に生えていた槐樹（えんじゅ）が人間の様に泣く（9月）、その翌年にも、王都の井水が血色に変色し、西海沿岸では小さい魚が死ぬ（2月）、数万匹もの蛙が樹上に群がる（4月）、鹿の様な大きな犬が西方より泗沘（沘）水の岸边へやって来て、王宮に向かって吠える（6月）、又、城内の多くの犬が路上に集まって吠え、1人の鬼が宮中に侵入してから地中に潜り、深さ約三尺のその場所よりは亀が1頭出現し、亀の背中には「百濟圓月輪、新羅如新月」の文が記されていた、といった具合である。

これらは、「三国史記」の記事を殆んどそのまま転用したものではあるが、そこに記されていた動植物（の行動が示唆したこと）は、人間の在り方を表現したものであり、「赤」（血の色）・「白」、「大」・「小」、「南」・「西」、「数万」・「三」・「一」、と言う様に、これらは夫々に於いて対極に位置するものとして対比されるのである。つまり、そこには「調和」の乱れこそが災異の元凶であるとした、対空間認識の存在を窺うことが出来るのである。聊か仏教に立脚した説話の如くであるが、

換言するならば、人為の失敗に対しては、それが動植物に姿を変えて、数々の変異として可視的に出現するとした対災異認識でもある。

「三国史記」は正史としての位置付けであったが故に、王権に依る過去の失政に就いては、中々素直には表現し難いという面も存在したであろうが、一然の場合に在ってはそうした懸念は余り無かった筈である。韓半島では、前王権の治世は否定され、消去され、上書きされる傾向があったにせよ、最後の百済王（義慈王）がそうした国家危機に対する数々の予兆を見逃し、又、恣意的に解釈したことを以って、王としての資質の無さを問うたのであろう。

取り分け、「太子宮雌鶏與小雀交婚」とした記述よりは、「牝鶏晨す（ひんけいあしたす）」の故事を想起させる。それは、孔子編とされる五経の1つである「書経 牧誓」〔牧野（中華人民共和国河南省）に於ける武王（周王朝を創設し封建制度を開始）の誓言〕^{（24）}に、「予（武王）其（まさに）誓。王（武王）曰、古人有言、曰、牝鶏（ひんけい。めんどり）無晨（ときする。朝の時間を告げる時を作る）。牝鶏之晨（若しめんどりが時を作ってしまう）、惟（これ）家之索（つくす。盡）〔家財を失ってしまう〕。今商（殷）王受（紂）、惟婦言是用、昏棄（こんき）厥（そ）肆祀（てきし）弗荅（こたえず）、昏棄厥遺王父母弟不迪（もちいる）」とある如く 周の武王の時のエピソードを念頭に置きながら、殷の紂王が婦人の言のみを受け入れて、伯父（箕子。きし）や弟達を退けた事例を引き合いに出し、女性が男性を抑えて権勢を振るうことは、家、国を亡ぼす予兆であるとした考え方である。災異の予兆であると見做されたのである。

それは又、百済宮廷の終焉を演出した編纂上の趣向であったものであろう。

⑤「早雪」として、季節外れの降雪を殊更に項目を立てながら記事としていたことが印象的であった。「三国史記」に在って、降雪現象とは、雪＝吉祥色としての白色、が出現する事象であり、吉兆であると見做されていたのである。「大雪」の場合、現在の認識ではそれは自然災害であるものの、古記録中に在って、それは白色の多い状態を示すことから、やはり大吉兆であったものと見られる。「三国史記」中でも、降雪を凶兆であると

した事例は殆んど検出することが出来なかった。夏季に於ける「大雪」現象自体は事実では無かったであろうが、一然の場合に在っても尚、対色彩認識には特筆すべき何か（靈妙さ）を感じていた可能性を排除することが出来ないのである。

おわりに

以上、本稿では、「三国遺事」を主たる素材として、韓半島領域に於ける自然災害情報がどの様に認識され、扱われ、記録されて行ったのかに関して、それらを「災害対処の文化論」として検証を行なって来た。その作業に際しては、倭国・日本との対比という手法をも用いた。「三国遺事」自体は、古記録として見た場合、確かに、信憑性に悖（もと）る部分も散見される他、「三國史記」の記事を大いに参照し、それを意識して編集された可能性もある。

又、所謂、正史ではない。編纂者も「三國史記」を編纂した金富軾が、王権に奉仕した官僚、史官であったのに対して、「三国遺事」を著述した一然（普覚国師）は宗教者であった。「三國史記」編纂の契機が、高麗国の仁宗（第17代国王）の王命に依る以上、記事の内容に正直さや、真実を記述することが第一の要素として要求されていたと見ることは早計であろう。それ故、「三国遺事」には、一然の生存当時に於ける自然で正直な形での史観や、対自然災害観を垣間見ることが出来得る可能性もある。ただ、彼は宗教者であることから、そこには、仏教に於ける思想の反映が含まれていることも又、想定しなければならないであろう。

註：

- （1）国史大系本（第26巻）『延暦交替式 貞觀交替式 延喜交替式 弘仁式 延喜式』（株式會社 吉川弘文館）2000年11月、に依る。
- （2）守屋美都雄氏訳注『荊楚歳時記』東洋文庫324（株式会社 平凡社）2009年12月、に依る。
- （3）国史大系本『日本書紀 前篇』（株式會社 吉川弘文館）1992年4月、に依る。
- （4）『世界大百科事典』初版（平凡社）の「モモ 桃」の項、参照。
- （5）「朝日新聞」（朝日新聞社）2018年5月14日付記事、参照。
- （6）「纏向遺跡第168次調査現地説明会資料」（桜井市教育委員会）平成22年9月19日、参照。
- （7）伊弉諾神宮「幽宮（かくりのみや）」所収の「祓」と桃の実」、参照。

- (8)『国史大辞典』(株式会社 吉川弘文館)の「桃太郎」の項、参照。
- (9)小林健彦『災害対処の文化論シリーズ I ～古代日本語に記録された自然災害と疾病～』〔2015年7月初版発行、販売：データ版はディー・エル・マーケット株式会社(DLMarket Inc)、製本版はシーズネット株式会社 製本直送.comの本屋さん〕—「4—8：えやみの鬼」、参照。
- (10)塚本哲三氏編『戦国策』漢文叢書(有朋堂書店)1925年5月、に依る。
- (11)『日本国語大辞典』第二版(株式会社 小学館)、『古語大辞典』第一版第一刷(株式会社 小学館、1983年12月)、『角川 古語大辞典』(株式会社 角川書店)には、「白乳」の項目は掲載されていない。
- (12)小林健彦『災害対処の文化論シリーズ VI 韓半島における災害情報の言語文化 ～倭国に於ける災害対処の文化論との対比～』(2019年2月初版発行、販売：シーズネット株式会社 製本直送.comの本屋さん)—「1—4：内容分析」、参照。
- (13)小林健彦『災害対処の文化論シリーズ IV ～北陸、新潟地域の古代と中世～』〔2015年10月初版発行、販売：データ版はディー・エル・マーケット株式会社(DLMarket Inc)、製本版はシーズネット株式会社 製本直送.comの本屋さん〕—「2—7：地震と「震動」、兵庫」、参照。
- (14)『日本国語大辞典』第二版、に依る。
- (15)小林健彦『災害対処の文化論シリーズ VI 韓半島における災害情報の言語文化 ～倭国に於ける災害対処の文化論との対比～』—「1—4：内容分析」、参照。
- (16)『老子 莊子 上』新釈漢文大系 第7巻(株式会社 明治書院)1972年6月、に依る。
- (17)小林健彦『災害対処の文化論シリーズ VI 韓半島における災害情報の言語文化 ～倭国に於ける災害対処の文化論との対比～』—「2—3：飢饉、蝗害、疾病、賑給、動物、治水、天文、その他の災害」、参照。
- (18)同氏「猿のイメージに関する一考察—中国のことばと文化」、『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室)第11号(通巻第38号)所収、67～87頁、2004年7月、参照。
- (19)『新古今和歌集』新 日本古典文学全大系11(株式会社 岩波書店)1992年1月、に依る。
- (20)「三國遺事 卷二」武王の項では、「第三十、武王名璋。母寡居(寡婦、やもめ)。築室於京師南池邊。池龍交通而生」とあり、百濟国の第25代国王であった武寧王(又は新羅国の真平王に就いての所伝と関連させて創作された空想上の男の人物)と見られる人物の出生に就いて触れる。それに依れば、寡婦であった彼の母親は京師の南に在る池の畔に住んでいたのであるが、その主であった龍と結ばれて璋を生んだとしているのである。これには、彌勒寺(王興寺。扶余の白馬江西岸に寺跡が残される)創建を巡る正当性を新羅国の真平王や、龍華山との関係性の中で主張しようとした編纂意図が見え隠れする。取り分け、「一日王(武王)與夫人(「新羅真平王第三公主善花一作善化」か)欲幸師子寺。至龍華山下大池邊。彌勒三尊出現池中。(武王は)留駕致敬(乗り物を止めて敬意を表した)」とした「三國遺事 卷二」の記載も、彌勒三尊＝龍、であると位置付けることに依り、韓半島に於ける仏教の正当な継承者としての王権の立場を強調しようとしたものであろう。更に、「京師南」、「下」と言った方向性も又、北極星(北の方角)を背にした形で地上支配の展開思想を想起させるものである。
- (21)丸善出版株式会社、2017年11月。
- (22)「新加通記第八 本朝神仙傳」(『改定 史籍集覽

第十九冊)近藤出版部、1921年4月、に依る)には、「都藍尼者、大和國人也、行佛法、得長生、不知幾百年、住吉野山麓、日夜精勤、欲攀上金峰山、雷電霹靂(へきれき。落雷)、遂不得到、此山以黃金敷地、爲待慈尊(弥勒菩薩。釈迦の入滅後56億7,000万年の未来に下界へ降臨して、釈迦の代わりに衆生を救済する菩薩)出世、金剛藏王(金剛藏王菩薩。修験道の開祖である役行者が、金峯山の山頂で衆生済度を祈願した際に、その信心が通じて感得したとされる菩薩)守之、兼爲戒地、不通女人之故也、所持之杖、變爲樹木、所拘之地、陷爲水泉、瓜(瓜、溫古)跡猶存」と記される。

これに依れば、大和国に在る金峰山の山麓に住んでいたトラン尼は、金峰山に登ることを落雷に依って阻止されていたことになる。話題上では、黄金に目がくらんだトラン尼がその煩惱に勝つことが出来ず、退けられたことにされている。又、彼女の年齢は数百歳に及び、その面では、八百比丘尼(はっぴやくびくに、やおびくに)に関わる所伝との共通項も見出されるのである。双方とも、モデルになった中国大陆、韓半島由来の伝承、物語の存在が想定されるが、何れも架空の人物(女性)であろう。

八百比丘尼とは、禁断の霊肉としての「人魚の肉」を食しながら、800歳に迄、生き永らえたとされる長命の比丘尼である。八百比丘尼が日本全国を遍歴したとされる伝承は沿岸部を中心として各地に残されるが、その中でも取り分け、丹後半島～北陸地方～新潟地域の日本海沿岸部地域にかけての所伝がその中核を成しているとされる。特に、福井県小浜市小浜男山2に所在している曹洞宗寺院である空印寺(直近の小浜湾に在る「人魚の浜」迄約270メートル、標高約4.5メートルの地点に建つ)がそのセンターであり、その境内に在る八百比丘尼入定の洞穴に於いて、彼女は自らの命を絶ったという。空印寺の立地とは、かつての震災に於ける津波浸水線であった可能性も考慮される。

その意味に於いては、一種のアジュール(境界領域)である。彼女の容姿は入定に至る迄、人魚の肉や九穴の貝(あわび)を食していた為、常に10代中頃の女性の如き若い容貌であったという。年を取っても尚、若い娘の様な白肌をしていたことより、白(しら)比丘尼と呼ばれた所以(ゆえん)でもある。ここにも、漁業者、海上通交者としての「海人」の存在が見え隠れする。

白(しら、しろ)は霊妙な色彩であり、吉祥色であるものの、私娼の語義もある。そこには元に戻る、又、復活し再生するという意味合いがある。北陸地方にある白山を信仰の対象とする、山岳信仰の起源は韓半島にあるとし、古朝鮮の檀君神話が白山信仰に影響を与えているとした指摘もある。檀君神話に見える太白山、白岳山、そして、韓半島の聖山である白頭山、長白山、小白山等、白字を冠する山の名称が多いことから、檀君の檀字は「パクター、ベクター」であり、白山そのもののことであるとし、韓半島より入朝した移住民が、故国の山岳信仰を越国(このくに。北陸地方、新潟県域)で再現したものであるとするのである〔全浩天氏「朝鮮からみた古代日本」(株式会社 未来社)1991年2月、26～33頁、参照〕。それ故、白比丘尼の持つ長寿や生命力の源泉とは、それに纏わる植樹伝承や、椿の花との関連性よりも、椿の花を依代にして神霊を降ろす巫祝の持つ霊力にも繋がり得るものであろう。

尚、小林健彦『災害対処の文化論シリーズ IV ～北陸、新潟地域の古代と中世～』—「2—12：人魚」、参照。

「駕洛國記」に記されていた猛士や大蟒は、何れも廟を守護する神物、化身であったが、それらは「本朝神仙傳」に於ける金剛藏王であり、戒地としての金峰山は守られるべき宗廟であった。戒地を犯そうとしてアジュールに侵

入する者は皆、神罰を受けるのである。それが、東アジア世界に於ける聖地としての戒地であった。

更に、トランニに依る金峰山登頂を阻止した「雷電霹靂」とは、韓半島に在っても、日本に在っても、天より発せられる警鐘としての大音声、大発光であり、畏怖されるべき自然現象であった。大嶙の「眼光如電」も、トランニの「雷電霹靂」も禁忌の最終警告としての位置付けであった。

(23)『日本霊異記』新 日本古典文学全大系30 (株式会社 岩波書店) 1996年12月、に依る。

(24)『書経 (上)』新釈漢文大系 第25巻 (株式会社 明治書院) 1983年9月、に依る。

参考文献表 (前編、後編共通) :

⑤当該表は著者名 (辞典、事典、史料、新聞等の場合は発行所) の50音順に依り配列してある。尚、複数の巻がある辞典の場合には、その発行年月を省略したものもある。

- 「朝日新聞」朝日新聞社
- 伊弉諾神宮「幽宮 (かくりのみや)」
- 『日本文化総合年表』岩波書店、1990年3月
- 「病は気から」の根拠を実験的に証明 交感神経による免疫制御のメカニズムの一端を明らかに (大阪大学免疫学フロンティア研究センター『Research PRESS RELEASE』所収、2014年11月)
- 『三国史記 (鑄字本)』学習院大学東洋文化研究所、1986年5月
- 『新古今和歌集』新 日本古典文学全大系11、株式会社 岩波書店、1992年1月
- 『日本霊異記』新 日本古典文学全大系30、株式会社 岩波書店、1996年12月
- 『風土記』日本古典文学大系2、株式会社 岩波書店、1958年4月
- 『萬葉集 四』日本古典文学全大系7、株式会社 岩波書店、1962年5月
- 大日本古記録『御堂關白記 下』株式會社 岩波書店、1954年3月
- 『角川 古語大辞典』株式会社 角川書店
- 『古語大辞典』第一版第一刷、株式会社 小学館、1983年12月
- 『日本国語大辞典』第二版、株式会社 小学館
- 『書経 (上)』新釈漢文大系 第25巻、株式会社 明治書院、1983年9月
- 『老子 莊子 上』新釈漢文大系 第7巻、株式会社 明治書院、1972年6月
- 国史大系本 (第26巻)『延暦交替式 貞觀交替式 延喜交替式 弘仁式 延喜式』株式會社 吉川弘文館、2000年11月
- 『国史大辞典』株式会社 吉川弘文館
- 国史大系本『續日本紀 後篇』株式會社 吉川弘文館、1993年6月
- 国史大系本『續日本紀 前篇』株式會社 吉川弘文館、1993年4月
- 国史大系本 (第3巻)『日本後紀 續日本後紀 日本文德天皇實錄』株式会社 吉川弘文館、2000年11月
- 国史大系本『日本書紀 後篇』株式會社 吉川弘文館、1990年12月
- 国史大系本『日本書紀 前篇』株式會社 吉川弘文館、1992年4月
- 国史体系本 (第22巻)『律 令義解』株式会社 吉川

弘文館、2000年6月

- 増補續史料大成 (第10巻)『建治三年記・永仁三年記・斎藤基恒日記・親基日記・親元日記一』株式会社 臨川書店、1978年12月
- 増補續史料大成 (第10巻)『後法興院記 三』株式会社 臨川書店、1978年8月
- 増補續史料大成 (第37巻)『大乘院寺社雜事記 補遺目録 十二』株式会社 臨川書店、1978年7月
- (京都府)大宮町文化財保護審議会監修『おおみやの民話』大宮町教育委員会、1991年9月
- 金思輝氏訳『完約 三国遺事』朝日新聞社、1976年4月
- 『朝鮮王朝實錄』國史編纂委員會、探求堂、1973年9月
- 朝鮮史学会編『三国遺事 (全)』国書刊行会、1971年7月
- 朝鮮史学会編、末松保和氏校訂『三国史記 (全)』国書刊行会、1973年2月
- 『改定 史籍集覽 第十九冊』近藤出版部、1921年4月
- 「法勝寺八角九重塔跡発掘調査現地説明会資料」財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、2010年6月26日
- 「纏向遺跡第168次調査現地説明会資料」桜井市教育委員会、平成22年9月19日
- 『日本史総覧コンパクト版Ⅰ』新人物往来社、1991年4月
- 全浩天氏『朝鮮からみた古代日本』株式会社 未來社、1991年2月
- 『大漢和辞典』修訂第二版、大修館書店
- 鄭高咏氏「猿のイメージに関する一考察 ―中国のことばと文化」[『言語と文化』第11号(通巻第38号)所収、2004年7月]
- 国立国会図書館蔵本「二十巻本 倭名類聚鈔」
- 似島雄一氏「一天下「天狗流星」に「閑」る ―中世の隕石落下とそのインパクト―」[『多元文化』第3号所収、2014年2月]
- 『世界大百科事典』初版、平凡社
- 『理科年表 平成30年 第91冊』丸善出版株式会社、2017年11月
- 三品彰英氏撰『三国遺事考証 上』塙書房、1975年5月
- 守屋美都雄氏訳注『荊楚歳時記』東洋文庫324、株式会社 平凡社、2009年12月
- 塚本哲三氏編『戦國策』漢文叢書、有朋堂書店、1925年5月

筆者に依る当該分野先行論稿 :

「国の終焉と災異記事 ―『三国遺事』に見る百済国の崩壊予兆―」[『融合』(中央大学学外大学教授白門会) 第30号所収、32~36頁、2019年2月]

